

「天人女房」と世界の類話

篠田 知和基

Les contes populaires du type AT400 et les contes japonais du type Femme céleste

Chiwaki SHINODA

Le conte de la Vierge cygne se trouve partout dans le monde, et au Japon, on relève une version de Fudoki du pays d'Ohmi. Nous connaissons des variantes tant littéraires que populaires, dont Hagoromo est bien connu comme pièce du théâtre No. Parmi les contes populaires japonais, on pense que le conte de la Femme céleste qui développe le thème de la Vierge Cygne, appartient au Conte-type 400-401 du classement Aarne=Thompson. Mais dans le conte de la Femme céleste se trouvent des éléments hétérogènes qui n'existent pas dans le conte-type 400-401. Ces motifs-là se trouvent par contre dans le conte-type 313. Le conte japonais de la Femme céleste doit appartenir au conte-type 313, mais le conte est modifié en plusieurs points pour s'adapter au climat et aux mœurs du Japon. Nous relevons ces aspects de transformations régionales, et nous les expliquons par des spécificités culturelles au Japon, comme le respect de l'autorité céleste, comme le fatalisme, et comme le système de la famille, etc.

- | | |
|--------------------------|------------------|
| I はじめに | V 天人女房 |
| II 白鳥処女説話 | VI 悪魔の娘 (AT 313) |
| III 牽牛織女 | VII モチーフの比較 |
| IV いなくなった女房をさがす話 (AT400) | VIII まとめ |

I はじめに

世界的な伝承である「白鳥処女」説話は、日本では風土記の「余呉の湖」伝説 および、「羽衣」伝承に見られるが、昔話では「天人女房」がそのタイプであるといわれる¹。さらに国際話型ではAT400番に属するとされる²。しかし、「天人女房」、「白鳥処女」、AT400番話の三者は同じ系列の

話であっても、まったく同一とは言えない³。「天人女房」の話はほかの伝承と関係する可能性はないだろうか。同じタイプの話でも風土記の白鳥処女説話は世界の白鳥処女説話にそのまま連なるのに対し、その話とは異なった展開をする昔話の「天人女房」は、同一の起源から出発して、その後、ほかの話型と結びついて、独自の展開をしているように思われる。柳田は『竹取物語』から「羽衣」まで、ひとつ

の範疇にふくめて論じたが⁴、その後、世界の昔話研究は、それぞれの話型ごとの独立の歩みを全世界にかけて追求するようになった。「天人女房」には、「羽衣」などにみられない「三つの試練」モチーフや、「禁忌背反」のモチーフがあり、それらのモチーフをふくんだ、やはり国際的な話型との接触が想定される。また「天人女房」は、「牽牛織女」あるいは「梵天国」などの物語とも同じモチーフをもっているが、そこでは白鳥は出てこない。これらの物語がいずれも諸外国の物語と密接な関係にあることは柳田も指摘しているが、そのすべてを、汎世界的な「白鳥処女」説話群とするには、異質な要素が含まれている⁵。ここでは「天人女房」を世界の「白鳥処女」説話と比較しながら、相違点を他のタイプの伝承と比較し、いくつかの伝承にまたがって固定した話型であることを論証する。

したがって、狭義の「白鳥処女」説話だけではなく、関連する話型を参照しながら、神話、地域伝承、昔話、文芸説話にまたがった物語群を世界的視野で比較する⁶。

昔話の話型研究ではAT400番⁷なら400番の類話だけ排他的に、しかし網羅的に世界中から集めて比較するが⁸、ここでは、むしろほかの話型や、神話などと話型やジャンルを横断して比較する。その方法は国文学的文献研究ではなく、比較文学的対照比較であり、また一話型に限定される昔話類型研究をもはみだし、比較神話学の視点からするものである⁹。外国、とくにヨーロッパの例は主としてフランスの昔話研究の成果を参照する¹⁰。

Ⅱ 「白鳥処女説話」

この話が世界的に分布することは早くから知られている¹¹。ヨーロッパではヴィーラントと白鳥の話や、「白鳥の後グルペー」(リトアニア)などであり¹²、インドではキンナリーのマノハラーとスダナ王子の物語¹³、東南アジアではアプサラス(天女)のウルワシとプルーラヴァス王の物語であり¹⁴、あるいは「ナラウと数珠かけ鳩」や、「ポロパタン」「マニンボロクとヴラン」「ママヌアとウランセンドー」¹⁵などである。あるいはアラビアでは『千夜一夜』に「バスラのハッサン」の話がある。白鳥が天から舞い降り、湖で羽をぬいで人間の姿になって水浴をする。その羽(あるいは羽衣)を隠して、天

に帰れなくなった天女を妻にする。しかし天女は、あるとき、隠されていた羽をみつけて、天に帰ってゆく。ここまでがどこにでもある部分で、白鳥ではなく、数珠かけ鳩であったり、あるいは天女であったりする。ヨーロッパの文芸伝承では、妖精と騎士の出会いになり、白鳥の形象がうすらいでゆく。またヨーロッパの昔話では、動物に変身させられた女王の話(AT400)になり、動物の種類も鹿、猫、羊、蛙、などになって、「白鳥処女」説話とは言いがたくなるが、白鳥のばあいも記録されており、また別話型で、白鳥、あるいはその他の鳥に変身する異界の女の物語がある(AT313番、後述)。男のほうは猟師、農夫、漁師、商人、鍛冶屋、王、などとさまざまである。

地域的にはほぼ全世界で、シベリアやアメリカ先住民の世界、あるいはオセアニアなどの広域のモンゴロイド圏にも、またアフリカにも見られるが、物語の筋は保持したまま地域的に動物種が変化する。

中国の場合は、文献話としての「牽牛織女」のほか、民間伝承では「中国の羽衣」¹⁶として知られ、君島久子が何度か論じている¹⁷。七夕伝承とむすびつく方向では小南一郎にも論考がある¹⁸。この七夕伝承は世界的には中国、日本の特殊例である。東南アジアの例は吉川、井本らが論じている¹⁹。ヨーロッパでは上記のほかにゴドフロア・ド・ブイヨンの始祖伝承などがあり、イザベル・グランジュに「鳥型妖精伝承研究」²⁰がある。なお、「牽牛織女」から「鳥型妖精譚」まで「白鳥処女」説話と言いうるかどうかは疑問である。

そのほかに白鳥処女のモチーフが上述のようにAT313番「悪魔の娘」²¹に使われ、また男子が白鳥になる例としてフランス中世説話の「エリオックス」やアイルランドのケルト説話「リールの王子たち」、あるいは「白鳥の騎士」などがある²²。

同話型で異類女房が白鳥ではない場合のうち、AT400に分類されず、原初的な「白鳥処女」の型を保っているものではヨーロッパではアザラシの場合が知られている²³。異類婚姻でも「クマ女房」(北欧、トルコ)などは異なる話型になる。こちらはおおむね、異類女房のところから男が逃げ出す話である。日本の「狐女房」も別で、これは異類女房のほうで正体をみられて別れてゆくので、その点は「鶴女房」もおなじである。すなわち、海外の説話の白鳥のイメージが日本では鶴になることがあるとして

も²⁴、物語としては「鶴女房」は話型をことにするとみられる²⁵。

すなわち、一般に昔話では動物種の入替えが可能だとしても、「白鳥処女伝承」では、動物種が異なると違う話になるばあいが少なくない²⁶。白鳥にだけこだわり、異類女房譚、それも異類が妖精など神的存在であるばあいかざれば類話は制限されてくる。「変身、禁忌、別離」のモチーフをもつ「白鳥処女」型の異類女房譚は、ヨーロッパでは昔話より、妖精伝説で語られるが、その典型は蛇妖精メリュジーヌ伝承²⁷で、鶯鳥妖精の話がそれにつづく。アルフ＝ランクネールが『中世の妖精』²⁸でおこなったメリュジーヌ譚の類話の分類では妖精が蛇であるばあいがおおく、鶯鳥のばあいはとりあげていない。むしろ異類といっても人間の姿で悪意をもった存在、すなわち悪魔の化身のばあいが含まれる。異類をキリスト教的存在とみとめない中世以来の観念にしたがっているからであろう。それに対し、コムエア＝シルヴァンは、より自由な視点から、妖精あるいは異類が善意をもってやってくるか、悪意をもってやってくるかで分けている²⁹。あるいは、その異類が天上（あるいは竜宮）の存在か、地上（あるいは水中）の存在かでわけることもできる。原則として、動物の姿、あるいは、それに関係した羽衣などを着てやってくる天上ないし異界の存在で、ただし悪意をもってくるものを除いたものが、異類女房となって人界にしばらくとどまったのち、人間の禁忌背反によって去ってゆくというのが、ひろく「白鳥処女」譚として考えられる。その異類は、人間より上位の神的存在である。狐女房、鶴女房、蛤女房な

どは、福をもたらしにくる神的存在である可能性があっても、人間との関係では、かならずしも上位のものとは認識されない。また「白鳥処女」はかならずしも福をもたらすとはかぎらない。愛とか美というものをのぞけば、とくに物質的な福をもたらすことはないのが普通で、そこでも日本の異類女房一般との相違がみとめられよう³⁰。天界から来る神的存在であっても、行動の自由はもたない存在で、天や妖精界の掟に従属する。彼女たちが地上にとどまるのは、例外的なありかたで、天帝にみつければよびもどされる。禁忌を人間がやぶれば去ってゆく。あるいは、羽を身につければ、人間の感情をうしなつて鳥になってとんでゆく。この別離の状況には、人間が禁忌を破った結果、妖精（天女）が鬼（悪魔、魔法使い）にさらわれるという場合もある。天帝、あるいは天女の父親であっても悪魔的な存在であることも少なくない。

天女あるいは白鳥妖精が人間と結ばれるのは、人間の側の策略や強制があっても、その関係はおおむね良好で、夫婦関係が決裂しなければならない状況ではない。それが別離に至るのはなんらかの禁忌背反があるためであることがおおいが、その背後に父性的存在の非合意、反感、悪意、あるいは天の掟などがあって、地上の結びつきを阻害する。その父性的存在を天帝と呼ぼうが、鬼と呼ぼうがおなじことである。

昔話として「白鳥処女」タイプがひろまっている東南アジアを中心に世界の代表的な「白鳥処女」の昔話をあげてみよう³¹。

主人公	異類女房	出会いの状況	衣の隠し場	福徳	禁忌(別離)	探索の手段	採集地
アリオ・メナク	天人	水浴	米倉	へらない米	見る		インドネシア
ポロバタン	天女	畑あらし			汚い言葉	水牛(太陽)	同
ナラウ	鳩	畑あらし			歌を歌う		同
トビトゥ(女)	天の王女	池あらし			料理を非難	はしご	同
マニンポロク	鳥(ヴラン)	畑あらし			指輪をはず	ボート	同
ママヌア	白鳥	畑あらし(池)			髪をぬく	魚(太陽)	同
きこり	天女	水浴				鹿 釣瓶	韓国
グルバー(女)	白鳥	水浴			羽		リトアニア

衣の隠し場を明示しているのは一例で、あとは特に問題にしていない。また、妖精が物質的な福徳を

もたらしたかどうかというと、これも一例以外は特記していない。それに対して、禁忌はほとんど存在

する。日本の羽衣説話では、特に禁忌を語らないが、インドネシアでは見るな、あるいは汚い言葉を使うな、髪を抜くな、歌を天女に歌わせるなどといった禁忌が働いている³²。アプサラスのウルワシの話では、夫が裸体を天女に見せてはならなかった。ここではさらに毎日一回、竹の棒で天女をつつくことという条件があり、これは禁忌というより、条件であり、性的隠喩とされているが、それほどむずかしい条件ではない。禁忌のほうは、裸体を見せないことというのは一緒に暮らしていればむずかしいし、それよりなんといっても不合理で、なぜそのような禁忌があるのか理解に苦しむ。あえていえば、竹の棒でつつくことという条件とは背馳しているようであるが、天人と人間のあいだの現実的關係を否定しようとする禁忌ともうけとれる。実際は夫婦であっても、神と人だから、超えられない一線があり、それが、裸体という肉体性だということかもしれない。

ここにあげなかったが、中国黒竜江の民話で「柴郎と仙女」というものがある。かささぎが水浴する天女の衣をとってきて柴郎に与え、天女の水浴の場へ案内する。ふたりは一緒になって末永く幸せにくらしたというので、天女が衣を着て去ってゆく話はない。また、語りだしは柴郎が傷ついたカササギを直してやったというもので、「鶴女房」をも思わせる。天女は花の精である。

「バスのハッサン」の話は波瀾万丈の長大な物語だが、骨子は白鳥のすがたで水浴にやってきた精霊の娘が、衣をとられてハッサンの女房になるものの、ハッサンの留守に衣をとりもどしてワークの島に去るという話である。その後、ハッサンは艱難辛苦の旅のはてにワークの島に辿り着き、妻と子供たちとに再会する。しかし、精霊の娘たちの姉女王が人間と結ばれた妹にありとあらゆる責め苦を与える。ハッサンと精霊の娘は魔法の助けをかりてひそかに女王の城を逃げだすが、女王があとを追い、戦いが繰り広げられるが、ハッサン側は魔神の助けをえて勝利を得、無事に妻をつれて国に帰る。

これらの話では、まず、本来の「白鳥処女」では動物としての白鳥がやってきて、人間にかわるが、天女であれば、変身はないし、白鳥のばあいも、その本性が天女、あるいは妖精であれば、白鳥は飛行のための仮の姿だということになる。いずれにしても、動物が人間にかわるわけではなく、人間あるいは天女が一時的に鳥の姿でとんでくるのである。日

本の「天人女房」には変身のモチーフはないが、動物から人間へという変身が主題ではないとすれば、その点ではおおきな相違点とはいえない。もうひとつは、とびさった天女を求めて天へゆくところが上掲のようにたいていの物語であり、これも日本の「天人女房」とおなじだが、そのさい瓜や南瓜の蔓を伝ってということはすくなく、つるべ、はしご、あるいは舟にのってゆく。それに「バスのハッサン」のように、その行く先は天ではなく、地上の島であったりする。

Ⅲ 牽牛織女

中国の「牽牛織女」伝承については、その名前の星について『史記』に記述があり、『詩経』に物語られ、後漢時代の『四民月令』『荆楚歲時記』などにあり、今日まで民間で伝えられる（小南、30-31p）。松村武雄の『中国神話伝説集』では『淮南子』および『述異記』によって、天帝が織女を牛飼いに娶わせたが、結婚生活におぼれて職務を忘却したので、天帝が7月7日にしかあえないようにしたという話がのせられている。飯倉照平の『中国民話集』（岩波）では江蘇省の話として、牛が牛飼いに教えて、水浴をしている仙女の衣を隠させ、女房にさせる。やがて子供ができて、天女が羽衣を求めると土台石の下からとりだす。天女はそれを着て天に帰る。牛飼いは牛の皮の力で宙にまいあがり天女の後を追う。天女はかんざしで線をひき天の川をつくりだす。神仙が仲介にやってきて7月7日にあうようにさせた、という話を紹介している。村松一弥の『苗族民話集』（平凡社）「牛飼いのダリエと天女のヤチュエ」だと、牛が牛飼いのダリエに教えて天女と一緒にさせる。水浴のモチーフはない。しかし、天女の緑の衣を天女に着せてはいけない。着せるととたんに天の父親にみづかり、天女が天につれもどされる。ダリエは牛にのって天にゆく。父親が伐採、種まき（粟）などの難題を課し、天女が助ける。また、ダリエが寝ているあいだに殺そうとしたりする。最後は叔父の雷神とはかって軍勢をさしむけるが、ダリエは雷神の魔法の太鼓をうばって軍勢を退散させる。雷神はひとり追ってくるが、ダリエは梭をなげて川をつくり、ボタンをなげて山を作り、針を投げて茨をつくって逃れる。最後に太鼓をなげだして叔父と舅を殺してしまう。牛は村人に儀礼をして殺してもらうと昇天

して彼らのところへやってくる。という話だ。この昔話集にはもうひとつ「天人女房と二人の子供」ものせられている。水浴している天女の衣をとって女房にするが、子供が羽の隠し場所（天井裏）をおして、天女が天にさる。ふたりの子供たちは地のはてまで歩いて行って、天に達する山にのぼり、赤い馬ののって空を飛んで母親のところへゆく。天では天女の父親が難題を課すがなんとかきりぬけ、母親ともども地上に帰るといふ話だ。難題はやはり粟に関するもので、ほかに山で大木をころがしてきて子供たちをつぶそうとしたり、森に火をつけて焼き殺そうとしたりする。

おなじ村松の『中国の民話』（毎日新聞社）では、牛におそわって7月7日に着物を洗いにおりてきた織女（はとの姿でくる）を衣をとってつかまえる。子供ができて、天女の求めに応じて衣をだすと、天女はそれを着て天に帰る。牛を殺してその皮をまとして天にのぼる。天で舅にかくれんぼ競争を挑まれる。それぞれ虫や針に変身する。最後はかけっこをし、追いつかれそうになって天女にもらったかんざしを振ると天の川ができる。それによって7月7日しかあえなくなる。かんざしを前にふるようにいわれていたのを、後ろにふったので、天女とへだてられたのだ。

小南が紹介している広東省の伝承では、牛郎と織女がともに天で愛し合い一緒になったが、結婚生活におぼれて職務を忘れたために天帝の命令で7月7日にしかあえなくなったという。『淮南子』とほとんど同一話である。また漢族の伝承としては、牛の教えで天女をめとるが、天の王母が天女をつれもどしにくる。牛飼いは牛の皮を着ておいかけるが、王母がかんざしで線をひいて天の川をつくって、7月7日にしかあえないようにする。（小南32-36p）上記の江蘇省の話とほぼ同一である。

これら中国の伝承に共通しているのは牛の援助であり、その牛の皮を着て天にのぼるモチーフである。これに似たモチーフは「バスラのハッサン」でもみられる。ダイヤモンドの山へのぼるのに、馬を殺してその皮のなかにはいっていると巨鳥がきて山のうえに運んでくれる。日本では「鮭の大助」のひとつに、牛の皮にくるまって鷲に運んでもらう話がある。しかし、一般的に、「白鳥処女」のタイプにつながる話で牛が出てくるのは、中国だけだろう³⁴。

民間伝承では天での試練が語られる。三つの試練

で山林伐採、焼畑、粟まきである。それと並行して寝ている間に、あるいは野に火をはなして殺そうとする。これは日本の「天人女房」でも共通するが、世界のAT313にも見られる。

もうひとつ、川でへだてられた二人が7月7日にしかあえなくなる。小南は七夕の行事の起源を説明するものだった（48p）としている。

日本で語られる「白鳥処女」型説話には、中国の「牽牛織女」型の「七夕起源」譚の性格をもったものがすくなくない。「余呉の海の話」のように、より世界的な「白鳥処女」に属する話もあり、文芸説話でも「羽衣」は「七夕」伝承とは無関係と見られるが、「天人女房」では柳田、関、稲田、白田らによって「七夕型」とされる話型がある。天女の後を追って天へのぼっていった男が禁忌背反の結果、大水を起こして天の川をつくってしまい、川の対岸にへだてられ、以来、7月7日にしかあえなくなったというものである。ただし、禁忌背反の結果、大水が出て天の川ができたという話は「牽牛織女」にはない。「牽牛織女」では一般に、天帝が7月7日に会うように命令するのである。いずれにしても各種の「天人女房」譚が日本で形成されるときに中国の「牽牛織女」譚が関係していたことはたしかだろう。

「牽牛織女」の牛飼いは日本ではほとんど出てこないが、「犬飼」というのがそのいいかえである可能性はあろう³⁵。一般には「犬飼」は宮廷での役職名となる以前は犬をつかって狩猟をするものをさすだろうし、民間では「犬飼」を職業としていれば犬をつれた狩人であろうが、「鉄砲うち」とか「猟師」といわずに「犬飼」といっているばあいには、中国の伝承の「牛飼い」の記憶がある可能性はまったく否定することはできないだろう。

小南一郎によれば、牽牛織女の物語は天地をうごかす陰陽のふたつの力が年に一度相あって交会して、力を取りもどすことを物語ると（200p）いう。禁じられた恋とは関係のない話だということになる。そのあたりは日本には伝わっていないだろう。また7月7日の祭りは農耕豊穰儀礼であり、もとは牛の犠牲祭であったろうという。牛飼いは牛を犠牲にする司祭でもあろう。であれば、これは白鳥処女説話とは根本的にことなっていることになる。白鳥処女説話では特定の日付は出てこない。あえて言えば、白鳥の渡りの時期であろうが、7月ではない。しかし小南は、まず7月の節季の儀礼があり、それ

を説明する説話が「牽牛織女」であろうとする。また、牽牛星と機織星のふたつにかかわる星占いの儀礼でもあったとするとますます白鳥の話とは遠ざかる。しかし白鳥処女のタイプの「牽牛織女」もあるし³⁶、その他でもトリは出てこないわけではなく、カササギが橋になって天の川を渡す。これは奇妙な伝承で、カササギでは橋になりそうもないし、川を往復するといった習慣もない。もう一つ、「牽牛織女」が白鳥処女説話と異なるところは小南の指摘する西王母との関係である。西王母伝承は周辺民族から東周の時代に中国につたわったであろうと小南は考える。「牽牛織女」の伝承はそれより古いだろうというのだが、白鳥処女の説話がそれ以前からあって、中国につたわって牽牛織女譚になったのかどうかはさだかではない。

天で牛飼いが試練を課されるというモチーフは、君島久子が紹介している「絵文字より和志武氏が解説漢訳した『人類遷徙記』」によると、主人公が旅の途中、鶴の姿の天女にあい、翼の下に隠れて天宮へつれていってもらふ。そして天で、森林伐採、焼畑に種まき、収穫をそれぞれ一日でやるように命ぜられる。これはあとでみるAT313の『三つの試練』の典型的なものである。(『民間説話の研究』同朋舎1987)。君島はそれにつづけて、四川省の同様な伝承を紹介している(前出書、270-271p)。試練はやはり、伐採、焼畑、種まきだが、そのあと、山の上から薪をころがすのでそれを受け止めるというオホアナムチの試練に似たものが加わる。天王は最後に家畜や穀物の種を与えて、地上におろす。

君島は中国における「敬天の思想」と、その儀礼において「天女の子孫たること」を語る言葉が誦唱されることに注目している。

IV 「いなくなった女房をさがす話」AT400

ヨーロッパの昔話では、「白鳥処女」タイプの物語はおおきくわければAT400-401の「いなくなった女房をさがす男」であるとされる³⁷。しかし、そのなかで白鳥が出てくる例は比較的すくなく、それよりおおいのは、魔法にかけられた王女の話で、森のなかの城に住んでいる蛇や鹿、あるいは、沼の蛙や、猫が、本来は人間の王女で、魔法によって動物に変身させられているのが、主人公との出会いと、大抵は主人公の献身的な試練によって人間の姿に戻

る話からはじまる。そのあとで、禁忌背反があって、王女がふたたび魔法使いにさらわれる。それをさがしに行つて、艱難辛苦のはてに王女をとりもどす。魔法使いから王女を救い出す試練が二回りかえされるのである³⁸。ただこれも神的存在である鹿妖精などが、人間の姿で主人公とまじわるが、禁忌背反の結果、妖精界へさつてゆく話とも解釈できる。そのばあいは白鳥女房が羽衣をとりもどして去つてゆくばあい、あるいは、鶴女房が正体をみられて去つてゆくの、そこまでは同じである。違うのはそのあとで、いなくなった女房をさがしに苦難の旅にでるところである。AT401も後半はほとんど同じで、前半の動物になっていた王女の魔法を解除するのに、三晩の試練をへるのがAT401、大蛇などへの「おそろしい接吻」をするのがAT400である³⁹。いずれも主人公が試練をへて、変身解除をする。それに対して、白鳥がみずから羽をぬいで人間になって水浴びをするのを、羽を隠して女房にするのが白鳥処女の話で、昔話の国際分類ではAT401Cとされるが、神話・伝説にはおおいものの、昔話としてはすくない。それに動物の姿の王女を女房にするだけではおならず、そのあとにいろいろな展開があるのが、「いなくなった女房を探す」物語で、まずAT400番では、妖精との愛を人につけてはならないという禁忌が課される。これは中世説話の「ランヴァル」⁴⁰などで使われるモチーフで、主人公は酔っ払ったり、あるいは王に強制されたりして言つてはいけない秘密を言つてしまう。するととたんに鳥の羽音がして、女房あるいは王女が鳥になってとんでゆく。あるいは、3日のあいだ王女の姿をみてはならないというのを見ると、王女がまた魔法使いにさらわれてゆく。(「巨人カラバルダン」)⁴¹。AT401では、三晩の試練で解放した王女と王女の国へゆくために泉のほとりで待ち合わせをするが、そのとき、なにも口にいれてはいけないという禁忌が課され、つりりんごとか麦の粒とかを口に入れると眠りこんでしまつて王女がどんなにゆすつてもおきず、王女はそれを三日くりかえしたあと⁴²、鬼(魔法使い)にさらわれてゆく。一旦手にいれた天女を禁忌背反の結果、鬼にさらわれるというのは、日本では「梵天国」などの筋だが、その点はもうすこしあとで検討する。

天界からやってくる存在であれば、鳥のケースがおおいはずだが、そのあとの禁忌背反のモチーフに

注目すれば、異類女房は白鳥であっても、魔法にかけられた鹿王女でもおなじになる。この禁忌背反のモチーフが日本の昔話には希薄である⁴³。

ヨーロッパでは、魔法にかけられた王女であれ、あるいは妖精世界からやってきた超越的な存在であれ、いずれにしても人間離れた美しい女を手に入れた男が、ふとしたことで禁忌をおかし、女を失ってしまう。その後、いなくなった女をさがしにでかけ、たとえば鉄の靴を7足はきつぶすまで歩いたはてに女（あるいは妖精）と再会する。この長い旅は禁忌背反による罪をつぐなうための試練だが、悪魔にとらえられている王女を救いだすために、悪魔の課す試練をクリアするばあいもある。すなわち超自然の美女との出会い、禁忌背反、失った美女をとりもどすための試練とが、ヨーロッパのAT 400番の「いなくなった女房をさがす男」の基本であり、そこで「いなくなった女房」というのが大抵は最初は動物の姿で現われる。その動物は白鳥であることもあるが、蛇であることもあり、鹿や猫や蛙であることもある⁴⁴。

ヨーロッパのこのタイプの物語では禁忌、ないし契約が何回かくりかえされる。まず、蛇王女に「おそろしい接吻」をするばあいは、けっしてしり込みしてはいけぬ。物語では三回、接吻する。それも一回ごとに相手がますますおそろしい姿になる。つぎは、そうやって変身を解除してやった王女を魔法使いの支配から救いだすために、一緒に逃げなければならない。そのさい、きめられた待ち合わせの場所にいっさい飲み食いせずにかなければならない。ここで普通は約束に反して、つい何かを口にに入れてしまう。その結果は、まちあわせ場所で眠り込んで王女がいくらゆすってもおきない。魔女が魔法のり

ングをたべさせたせいだとか、ねむり薬が仕込んであったなどとも言いが、本来、なにに何をせずにくることという一見不合理な約束があって、それにそむいたのが原因である。うまくその条件をクリアすれば、王女をつれて、馬車にのって魔法使いの支配のおよばないところへ逃げるのができたはずだ。

あるいは三日間は王女の部屋をのぞいてはいけなかった。のぞいてみると、金髪をとかすたびに金貨がこぼれている。その金貨を魔法使いにわたして、解放されることになっていた。このどちらかの条件に違反して、王女が魔法使いにさらわれる。そのあと主人公は、王女の後をおって長い旅にでる。その途中で動物の援助をうけて、目的地にたどりつく。たとえば、鷲の背にのせていってもらう⁴⁵。

いずれも、天女（王女）を失ったあとの探索と試練の話だが、動物としてあらわれた存在が人間の姿になって夫婦になること、その配偶者を禁忌背反の結果失うこと、そしてそれをさがしに行つて試練の結果とりもどすことという一連の筋がきに1・変身、2・禁忌（背反）、3・別離、4・探索（試練）というモチーフの連鎖があつて、その点で「白鳥処女」説話の展開であり、またわが国の「天人女房」と同系の類話であるとみなされる。しかし「おそろしい接吻」あるいは「三晩の試練」「不思議な眠り」などは「天人女房」にはなく、変身もAT400では魔法変身であるのに対し、日本では天女の自然変身である。構造は同じだが、話としては共通性はすくない。別離にも禁忌背反が明確であるのに対し、羽衣をみせるといだけのモチーフではことなる。探索の旅の種類、手段もことなる。

AT400-401の例〔フランス〕

題名	異類女房	魔法解除	禁忌	旅の手段	援助者	結末	採集者
カラバルダン	鹿	指輪	見る	七里靴	風	鬼を殺す	リュゼル
粉屋と鷲鳥	鷲鳥	射撃	言う	七里靴	風	同	セヴェール
スペインの王女	蜥蜴	三晩の試練	食べる		魔女	結婚の許可	マシニオン
二文のヤニック	蛙	接吻	食べる	魔法の玉	鳥の王	同	リュゼル
魔法の城	化け物	三晩の試練	ねむる	魚の背	魚 鳥	逃走	カディック
トリボール	山羊	三晩の試練		舟		結婚の許可	セビヨ
金獅子の城	山羊	三晩の試練	ねむる（魔女）	鳥の背	鳥の王	結婚	ドラリュ

フランスの例のみあげだが、ここでは異類女房が鳥であるのは一例だけである。魔法解除は「おそろしい接吻」か「三晩の試練」で、夜中に悪魔たちに八つ裂きにされたりするのを耐える。そうやって手に入れた王女はまだ魔法使い（鬼）の手を完全に脱することができない。「巨人カラバルダン」だと、「三晩のあいだは見るな」というのを見るととたんに王女が鬼にさらわれる。あるいは、王女と一緒に逃げ出すために待ち合わせをするが、物をたべるなどという命令にそむいて、ついポケットの中の麦をかじったり、魔女にすすめられるりんごを食べたりする。すると、とたんに眠り込んで王女がきても起きられない。これは「寝るな」の禁であるといってもいい。その結果、ふたたび失った王女をさがしにでかける。鉄の靴を七足はきつぶすというのは上の例にはないが、ほかではかなりよく出てくる。いずれにしても数年かかる旅だが、上の三例では、風の援助と七里靴のおかげであつというまに鬼の城につく。

「白鳥処女」タイプ（AT400-C）ではリュゼルがプルトーニューで採集した「ピピ・ムヌー」がある。白鳥が水浴しているのを見て、衣を隠し、城へつれていってもらふ。娘の部屋へ忍んでゆくが、ほかの姉妹の嫉妬を買い、逃げ出す。これをドラリュはAT313に分類している⁴⁶。

V 「天人女房」

日本では「天人女房」⁴⁷の後半が、このAT400～401の物語に相当する。「いなくなった女房をさがす夫」である。もっとも、天女がどこへ行ったかわからないのではなく、天にしていることはわかっている。去り際に手紙をおいてゆき、天に帰るが、会いたければ、南瓜を植えて、草鞋千足、または牛1000頭をうめてのぼってこいなどという。置手紙のモチーフはAT400にもある。眠り込んだ主人公の手に、黒山へ探しに来るようになどと書いて立ち去る。ただ、「黒山」と言ってもどこかわからない。昔話の異類女房譚は「天人女房」のほかは、「鶴女房」のように、天女が去ってゆくのを男が呆然とみつめるというタイプの終わり方をする⁴⁸。去っていった女房をさがしに天にまでゆく「天人女房」譚は、日本の昔話では、異類女房以外をみてもあまり例のない、異質な物語である。「鶴女房」をみてもわかるとおり、日本では、逃げた女房をさが

しに行く夫は例がない⁴⁹。また、「いなくなった女房をさがす旅」と比較すると、発端が「白鳥処女」説話を忠実にうけている点で、世界のAT400の中では例外にちかい。世界のAT400番話では、白鳥処女がやってきて、衣をぬぐと人間になるという話はめったに語られない。もっとも、日本の「天人女房」はその名がしめすとおり、天人で、白鳥ではない。羽衣をきているが、白鳥とされることはまれである⁵⁰。しかし天女が白鳥の姿でやってくるのが本来で、人間のような姿の天女でやってくる羽衣型は、基本形の変化であろう。それについては君島は本来、天女は鳥であったと断じている（『昔話研究集成』）。ただ、鳥でなくとも、水浴中の天女の衣を隠して女房にする点は「白鳥処女」から「天人女房」につづいている。

「天人女房」は、そのあと、天まで女房をさがしに行つて⁵¹、天で舅から試練を課され、それに失敗して地上に落ちる話になる。この後半部は、天の畑で、切つてはならないとされていた瓜を切つたところ、そこから大水が出て、流されたということがおおく、流されながら7月7日に会おうと言つたという話では、七夕由来の話になる。最後が七夕由来だというのは、一般には「七夕型」としているが（『日本昔話事典』ほか）、試練に失敗するばあいの様態はさして重要ではなく、ことに国際話型としては「七夕」と「離別」では区別しがたい。そもそも「七夕型」でも、じっさいに7月7日に二人があうかどうかはわからない。試練に失敗して大水が出て、そのまま地上におとされるのでも、大水が天の川になってへだてられるのも同じであり、天からおりる綱が切れるばあいも大きくいえば同じだ。ただ、大水と綱が切れるのとはそれだけで見れば多少違うかもしれない。この結末を別にして、天人が去っていったあとの後半部に注目すれば、国際話型のAT400～401「いなくなった女房をさがす男」になる。しかし、「牽牛織女」や「天人女房」では、ふたりが離れ離れになるのに対し、「いなくなった女房をさがす男」ではハッピーエンドになる。

また、天人女房がいなくなる原因も、AT400～401では、主人公が「言うな」「見るな」「食べるな」などの禁忌背反を犯すからだが、「天人女房」では禁忌は明示されない。

	出会い	衣	動物援助	天への道	試練	禁忌	結末	採集地
薪とり	水浴	稲の下		綱	畑	瓜を切る	大水	鹿児島喜界島
犬飼	水浴	藪	犬	瓜 草鞋千足		瓜を切る	大水	熊本(鮑託)
源五郎(木挽)	水浴	櫃		南瓜 牛千頭	雨ふらし	桶を覆す	落下	長崎(島原)
樵	舞い	行李	(別話に鹿)	雲にのる	瓜番	瓜を食う	大水	香川(仲多度)
狩人	水浴	大黒柱	犬	木をのぼる	蕎麦畑	瓜を食う	大水	徳島(祖谷山)
猟師	水浴	(櫃)	犬	松をのぼる		水瓜	大水	広島(比婆)
炭焼き				ほうの木	粟の種まき	瓜	大水	島根(八束)
花作り	花とり			ほうふらの木	粟の種まき	瓜	大水	鳥取(東伯)
商人	水浴	唐櫃		瓜	畑	瓜	川に流れる	新潟(佐渡)
漁師		天井	犬	夕顔		胡瓜	大水	福島(平)
漁師	水浴		犬	瓜	伐採、種まき	瓜を食う	大水	宮城(本吉)
魚つり	水浴	畑			(機織)			岩手(遠野)

関歌吾「日本昔話大成」「天人女房」の項より

最後の例は「絵姿女房」の系列で殿様に天人児がめしあげられる。ほかはほとんど犬をつれた漁師、または猟師である。

いなくなった天人をさがしに天へのぼるのは、たとえば南瓜の蔓をつたってゆく⁵²。それほど困難ではない。そのとき、すこし肥料が足りなくて、蔓が天にとどかないのを、犬をほおりなげて、その尻尾につかまってあがるなどという。このあたり、肥料としてのわらじ1000足に1足不足するというモチーフはのぼってゆく男の条件不足、たとえば、身体欠損にあたると山本節はとく⁵³。わらじに近いのはヨーロッパの「鉄の靴」でこれを7足はきつぶすまで歩いていった先にさらわれた王女がいる。この靴の話が伝播の途中でわらじにかわる可能性はあるだろう。わらじのばあい7足ではすぐすりきれるから1000足くらい必要だ。鉄の靴7足とわらじ1000足なら、だいたいあいそうである。わらじでも3日から4-5日くらいはもつだろう。1000足あれば3年から4-5年は歩いていける。鉄の靴でも2-3年たてばすりきれるだろう。それが7足なら10年から20年で、すこし年数があわないが、昔話では、それくらいの差は許容されるにちがいない。わらじ3000足などとはいわないのだ。1000足というのは途方もない数という意味だ。もっともそれを南瓜の肥料に埋め込むという話もある。熊本の伝承はそうである。そのほうが合理的だが、そのばあいはわらじではなく、藁束でもよさそうだ。埼玉の話で俵千俵積めというの、そのヴァリエーションだろう。俵

なので、積んでのぼってゆくが、本来は埋めて南瓜をはやさせるものだったろう。また、大分では牛1000匹を南瓜の根方にうめるといい、これも肥料としてはわからないでもないが、牛1000頭は鉄の靴7足より過酷である。島根では一日7斗の酒をそそげといい、これも大変だが、ほかにはあまり例はない⁵⁴。

女房のあとを追ってゆく旅は諸外国では困難をきわめ、7足の鉄の靴をはきつぶすまで歩いていったりする。それに対して、日本の「天人女房」では、困難ではあっても、語りの時間のなかではあつという間に天にのぼる。それも草鞋千足をつんでという条件に1足たりなくともなんとかなる。黄牛1000頭をうめて肥料にしてというのでも、999頭でのほりだす。わらじ千足でも、牛千頭でも、大変なことは大変だが、どうやって、その「難題」をクリアしたかは語られない。現実にはしがたない農夫、あるいは漁師が牛を1000頭も買ってきて殺すことはまずできない。1頭や2頭でも大変な犠牲である。それを実現しなければならないとなれば、数頭であっても何年もかかるだろう。しかし物語は牛を1000頭うめればいいと聞いて、999頭まで埋めたという。ヨーロッパの鉄の靴7足をはきつぶすというのも大変で、物語では、何年も歩き続けたという。またそのあいだに、隠者や、太陽や、月などに道をきいたり、風に助けってもらったり、動物たちのいさかいの仲介をして、千里靴などの魔法の品物を手にいれたりする。魔法がかかわれば、いかな困難でもあつという間に

解決するが、その魔法を手に入れるのにもそれなりの苦勞をする。日本では、魔法だともいわずに、とうてい不可能と思われることがあけなく実現する。牛1000頭だけではなく、そうやって育てた南瓜の蔓をのぼって天へゆくことでも不可能だが、物語では簡単にのぼってゆく。ただ、牛が1頭たりないので、天までもうすこしというところでとまってしまう。このとき、わずかでも条件をみたさなければ、すべて水の泡になるのがヨーロッパの話であれば、日本のばあいは、この条件違反が大目にみられる。つれていた犬を天にはおとりあげて、犬にひっぱりあげてもらったりする。天への旅がさほど困難ではなく実現すること、その際、条件を課されているにもかかわらず、その条件を完全にみたさなくとも天にたどりついてしまうこと、そこに恐らく日本文化のあいまいさがあるだろう⁵⁵。

その旅の困難さより、天で、天人の父親から課される難題のほうがむずかしい。国際話型ではAT 3 1 3に出てくる難題と同じ種類である。農耕試練で、森を伐採する。種をまく。一日で刈り取る、といったものだ。もちろん天人が助けてくれる。AT 3 1 3では、昼の農耕試練のほか、夜は危険な寢床などの試練、あるいは死の脅威がある。「天人女房」では、そこまで悪意をあからさまにする舅はいない。そのあとで、天の瓜畑で番をする。そのとき瓜をたべてはいけない。あるいは瓜を切れといわれても縦に切ってはいけない。この条件に違反して瓜から大水が出て、主人公は水に流されて地上におちる。あるいは、大水が天の川になって、その向こう岸に追いやられる。「天人女房」ではこれでおしまいである。

類話では「梵天国」がある。まず最初は玉若が笛をよくし、梵天王から姫をたまわる。日本の帝が難題をだす。最後に梵天王の自筆の文書を求められ、梵天国へ赴くが、そこでとらわれていた鬼に飯を与え、鬼が逃走できるようにしてしまう。鬼は姫をうばってさる。玉若は羅刹国へ赴き、姫とともに逃げるが、おいつかれる。そこへ天からカリョウビンガが助けにやってくる。無事日本にもどる。昔話では「笛吹き婿」「絵すがた女房」にまたがっている。敵対者として鬼と日本の帝とふたりいるが、これは他の物語では同一人である。天は梵天王によって代表される。この天の父親は「天人女房」などとちがって

好意的である。つまり、天帝、あるいは敵対者に相当するものが、梵天王、鬼、日本の帝と三人出てくる。現世の権力者、天の権力者（天人の父）、悪の権化である。「天人女房」ではこの三者が一人になっている。「悪魔の娘」でも同じだし、「牽牛織女」でも、天人の父が暴戾な悪もので、天界、地上すべてに権力をふるっている。主人公のほうはおおむね、下賤で、さしたる能力もないものがおおいが、「梵天国」では右大臣の御曹司であり、さらに観音の申し子だから、なかば天の子ともいえる。そして笛の名手である。

ヨーロッパのAT 4 0 0では、艱難辛苦のはてに地のはての「黒山」⁵⁶などにたどりついた主人公は、魔法の剣など、途中で手に入れた魔法の品物で鬼を簡単に退治して、「いなくなった女房」をとりもどし、国へかえって幸せにすごす。

日本の「天人女房」は禁忌背反のモチーフをもたず、逆にAT 4 0 0にない「三つの試練」のモチーフをもっている。しかし、禁忌についていえば、AT 4 0 0とは違う場所で課されている。つまり、天人に再会したあとで、瓜を切ってはならないという禁忌が課され、それに違反するのである。AT 4 0 0では、天人に相当する魔法にかけられた王女を手に入れたあと、三晩の試練があり、そのさいに「見てはならない」「言ってはならない」といった禁忌が課される。その結果、王女を失うので、「天人女房」でも、大水が出て離れ離れになったあとで、ふたたび「いなくなった女房をさがし」にでかけるなら、両方の物語はびたりと一致する。禁忌の種類としては、AT 4 0 1で、待ち合わせの場所へゆくの何にも口にしないことというものがある⁵⁷。

試練のほうも、王女と再会した主人公に課される試練はそれほど大事ではない。むしろ、最初、動物になっていた王女の魔法を解除するのに困難な試練に服したのだ。しかしその試練は三晩の試練でも、三回のおそろしい接吻でも「天人女房」のそれとはカテゴリーも同じではない。物語のなかで、試練も禁忌も共通してあるとしても、それぞれの種類や場所がことなる。

一旦失った女房をとりもどしにゆくのが、ヨーロッパのAT 4 0 0 - 4 0 1では地の果てで、日本では天であることはかならずしも決定的な違いとはいえない。いずれにしても遠いところである。ヨー

ロッパで「天」と言えば父なる神のいるところというイメージがあり、昔話の主人公が冒険をいどみにゆくところではないが、日本の「天」にはそれほどの超越性はない。逆に「地のはて」というものが、大陸ではないのでイメージしにくいので、日常世界からとく離れたところということでは、天でも地の果てでもさしてちがいはない。問題はそこで、女房をとらえている存在である。日本の「天人女房」では天人の父親である。ヨーロッパのAT400-401では、魔法使いである。日本でいえば、「梵天国」の鬼である。父親というのはいかにも日本の家父長制の社会をうつしているようではあるが、異類婚姻譚で、女の父親が出てくる話はそうおおくはない。「鶴女房」で鶴の父親が介入したという話はないし、狐女房でも狐の父親などいるかどうかもわからない。竜宮婿のばあい、竜宮に招かれていった主人公が竜王に歓迎されるという筋はあるが、この父親が若い二人の結びつきに反対したという話はない。「絵姿女房」では、殿様が天人を奪おうとする。幸せな婚姻をさまたげようとするのはライバルであり、父親ではない。父親が反対するといえば日本ではいかにもありそうだが、昔話ではその日本でもあまりないのである。またAT400でも父親は出てこない。あえていえば、中国の「牽牛織女」で、若者たちの結びつきを邪魔するのが天の父親で、これはミャオ族の「牛飼イダリエ」でも同じだから、中国の伝承の伝播とも思われる。

すなわち、日本の「天人女房」はAT400-401とはあまり合致せず、また「羽衣」⁵⁸なども違うが、「牽牛織女」などの中国の伝承には近いところがあるのである。しかしそれも天の父親が邪魔をするということ以外は、その父親を殺してしまうのが中国であり、中国では牛の助けで天にのぼるのに対し、日本では牛はめったに出てこないというように、これまた、相違がめだつのである。

日本では牛の代わりに犬が出てくるが、猟師のばあいはある程度必然性があるが、東北のように海の漁師の場合は、犬の役割は不明である。

VI 悪魔の娘 (AT313)

日本の「天人女房」が外国の話に似ているところは、「三つの試練」で、中国でもそれに近い話がある。ミャオ族の「天人女房と二人の子供」では天にのぼっ

ていった二人の子供が天女の父親から三つの難題を課される。まず最初はかくれんぼで、老人が牛や馬に変身するのを子供たちが見抜く。つぎは山へいって木をきる。その木をころがして子供たちをころそうとする。これもなんなくきりぬけると、つぎは野焼きをして、焼き殺そうとする。子供たちは穴にもぐり、瓢箪から水をだしてのがれる。最後は粟をまいて、翌日、それを全部ひと粒のこらず拾う。山の伐採と野焼きは焼畑の準備のようである。そこへまく粟も焼畑の代表的な産物だ。ここは日本の「天人女房」の試練に似ている。しかし、ヨーロッパで好まれている物語であるAT313の「悪魔の娘」あるいは「麗しのウララー」には、「天人女房」とまったく同じ三つの試練が出てくる⁵⁹。

「悪魔の娘」は、悪魔の城へついた主人公が、悪魔の課す三つの試練を、悪魔の娘の助力できりぬけ、その娘とともに逃げ出してくる話を中心としている。悪魔の城へ主人公がゆくことを説明するものとして、主人公の父親が悪魔と契約をして、息子を人質にさしだしたというものがおおい。城へゆく途中で池で羽をとって水浴びをしている鳥妖精をみて、その羽をかくして協力を約束させる。じつはこの妖精が悪魔の娘で⁶⁰、以後、主人公を助ける。ここは、AT400-401ではめったに出てこない「白鳥処女」モチーフである。水浴中の白鳥妖精の衣を隠して、夫婦になるのである。さらにそれを妖精の父親が邪魔し、主人公を殺そうとしたり、難題を課したりする。この難題は森の伐採、開墾、種まき、取り入れなど、農耕試練である。キリスト教文化圏なので「悪魔」という言い方をするが、白鳥妖精の父親だから、ほかの文化圏であれば「天帝」といってもおかしくはない。白鳥の姿で湖にきて水浴していた天人を捕まえて一緒になり、娘の父親の城へいって、父親の課す難題を切り抜けて、最後に天人と一緒に逃げだすのである。この最後のところをのぞけば、「天人女房」の白鳥型と同じである。

逃げ出すところでは、いわゆる「呪的逃走」がつかわれる。妖精が魔法をつかって変身をしたり、あるいは物をなげて障害物をつくったりするのである。ここで最後に川が出てきて、父親のほうがかそこにかかった橋をわたろうとして、川に落ちて、おぼれてしまうということがある。日本の昔話では鬼のところから逃げ出してきた母と子が、川をわたってのがれ、追ってきた鬼が川の水をのみほそうとして腹が

バンクして死んでしまうという場合があるのが想起される（「鬼の子小綱」）。ただし、いずれもあまり頻度の高いモチーフではない。ふつうは悪魔は追跡をあきらめてもどってゆく。逃亡者は無事、この世とあの世の境をこえるのである。

「悪魔の娘」はそこで、いままで検討した物語にない展開をする。すなわち、国境をこえたところで、娘が待っているあいだに主人公がさきに家に帰って、娘を迎えにくることになる。異類の娘であるから、直ぐには、この世にうけいられないのだ⁶¹。そのとき、主人公には家にもどってもだれとも接吻してはいけないという禁忌が課される。これは、AT400で「おそろしい接吻」をして王女の魔法をといたことの裏返しである。あるいはAT401の、禁じられた行為によって眠り込んで待ち合わせをのがしてしまうことにも通ずる。接吻によって、それまでの記憶を忘れ、娘はまちぼうけをくわされる。そのうち、主人公はほかの娘と結婚をしようとする。忘れられた娘が三晩の試練で思い出させてもらう。三晩、主人公の部屋にはべって、寝ている主人公に語りかけるのだが、主人公は眠り薬をのまされておきない。これもAT401の待ち合わせに眠り込んでしまうモチーフの裏返しである⁶²。しかし、最終的には悪魔の娘は主人公に認知され、ハッピーエンドになる。これは「なくした夫を探す女の話」（AT425）で、「いなくなった女房を探す男」と対をなす物語である。

「悪魔の娘」は以上見たように、白鳥処女譚と同じ出だしをもち、「三つの試練」「呪的逃走」「禁忌背反」「別離」「再会」「認知の試練」と、ここで検討している物語のおおくと共通した要素をもって展開している。魔法変身は娘のほうの自主的変身では

あるが、AT400と共通しており、禁忌は「見るな」「言うな」「食べるな」などおなじく「接吻するな」となり、「接吻」自体はAT401では、むしろ王女の魔法をとくための試練として使われる。忘却、あるいは眠り薬による眠りもAT401の構成要素である。そしてしかし、それらAT400-401と共通した構成要素をもって話としては白鳥処女のモチーフを展開させ、悪魔を天帝とかえれば、そのまま「天人女房」になるところもっているのである。

ところで、このAT313の「悪魔の娘」は、別な面で日本のほかの伝承とつながっている。すなわち、「呪的逃走」はイザナミのところからイザナキが逃げ出すときに使われるモチーフであり⁶³、スサノオのところからオホアナムチがにげだすときも似たシチュエーションになる。そしてオホアナムチのばあい、スセリヒメを獲得するためにスサノオに課された試練がまさに「悪魔の娘」とおなじ「三つの試練」である。

オホアナムチは根の国におもむいて、スセリヒメと出会い一緒になろうとするが、父親のスサノオによって蛇の室、ムカデと蜂の室に入れられ、それをスセリヒメの助力できりぬけ、最後の試練の野焼も、鼠の穴にはいって逃れる。典型的な「三つの試練」である⁶⁴。そのあと、オホアナムチはスサノオの頭の蚤をとるふりをしてねむりこませ、その間にスサノオの髪をはしらにゆわえつけて、天の詔琴をとってにげだす。そのさい、琴がものにふれて音をたて、スサノオが目をさましておいかける。これは、ヨーロッパでは悪魔のところから月とヴァイオリンと隠れ蓑などを取ってくる話（AT328）である。

AT313「悪魔の娘」フランスの例

タイトル	出会い	鬼	三つの試練	呪的逃走	禁忌・忘却	結末	採集者
緑の山		悪魔	伐採、池浚い、山頂の卵	変身	接吻	記憶を回復	マシニョン ⁶⁵
緑の鳥		鬼	糸ほぐし、羽の選別	変身			コスカン
白衣の娘	水浴	城主	伐採、池掘削、塔の登攀	変身		悪魔が溺れる	セビヨ
オレンジの木	水浴	父親	伐採、山ならし、砂の数	変身			マシニョン
緑山の黒男	水浴	悪魔	池浚い、梨もぎ、鳩ノ巣	変身			ドゥヴェイエ
白しか	狩	悪魔	庭、城、池をつくる	変身			カルノワ
黒山	水浴	髭男	泉、畑、庭をつくる	変身	牛に変身・忘却	記憶を回復	プーラ

「悪魔の娘」というのはフランスだけで、アアルネ・トンプソンではAT 3 1 4とあわせて「呪的逃走」、3 1 3だけでは「逃走を助ける娘」という題になっている⁶⁶。グリムでは「いとしいローラント」⁶⁷、バシーレでは「ロゼラ」、アフアナシエフでは「海の王とかしこいワシリサ」、カナダでは「麗しのウラリー」となる⁶⁸。新倉はこのタイプで「白鳥処女」タイプの語りだしをもったものはフランスではない（『フランスの民話』）というが、カディックの例で「シャラジヌの娘」では三人の娘が水浴をしており、「黒山」では白、赤、黒の鳩が水浴している。これが赤、白、緑の衣の娘だったり、三色のリボンだったりするが、同じことである。マシヨンの「オレンジの木」でも水浴している娘の緑のベルトをとる。

ここであげたものはそれぞれ特徴的なものを選別したもので、ドラリュの目録では88話が収録されている。

ところで、ドラリュの目録でも、アアルネ・トンプソンでも、この物語の後半には「忘れられた花嫁」「記憶の回復」があることになっているが、上の表では、その部分があるのは2例だけである。もちろん、ドラリュの88例のなかで、この部分、とくに禁じられた接吻とその結果としての忘却のモチーフをもっているものが28例ある。しかし、忘れられた許婚が、思い出してもらうために王子の寝室に三晩はべって、昔のことを語って思い出させようとするが、王子が眠り薬をのまされておきないというのは、AT 4 0 1の「待ち合わせに眠り込む」話と同じだし、またほかでも使われるモチーフである。あるいは、娘が宿屋をひらいて大勢の男をとめ、王子がやってくるのを待つというのもほかの話である⁶⁹。

禁忌背反の結果、天人を失う話としては、天人が男性であるばあいは日本では「天稚彦物語」（お伽草子）である。あけてはいけぬ箱をあけて天人が地上にもどれなくなる。しかし、この天人が白鳥であったという話はない。「天人女房」で天人が女性であるばあいは、鳥であると明示されることはかならずしも多くない。余呉の湖の物語では天から白鳥がおりてきて、湖で羽の衣をぬぐと女人の姿になるが、昔話の「天人女房」では、羽衣をとりもどしたあと鳥になったとは言わない。昔話では動物が口をきいたり、人間が動物になったりすることはすこ

しも不思議ではないが、風土記では白鳥と明示されているのに対し、昔話は羽衣というだけで、鳥になったとはあえていわないことがおおい。

「悪魔の娘」と「天人女房」の相違は契約の観念の有無である⁷⁰。超自然が悪魔や魔法使いという人間に近いものの力とされることと、天の宿命とされる違いもある。悪魔の娘では女が積極的で、自分の意思をもっていることがきわだっている。天人女房には自分の意思がない。男の女房になったのも仕方がないからであり、さってゆくのも羽衣をきたらどうしようもなく、天が恋しくなったからか、天の命令があるからで、自分の意思ではない。男のほうはどちらでもさして積極的な行動はしない。悪魔の娘はまさに超能力をもった娘の物語で、彼女が男をみそめ、自分の城に案内し、娘のほう親の試練を代行し、そして、娘のほう逃走を計画し実行する。そのあとも、わすれられた娘が試練の旅に出て、自分の力、このばあいは、彼女の魔法の力は効力を失っていて、人間的な努力で男をとりもどす。まさに行動的な女の物語なのである。

Ⅶ モチーフの比較

この「天人女房」で出てきた難題を共有するAT 3 1 3の物語は、ヨーロッパで好まれている話で、最初は父親が悪魔と契約をし、息子をさしだすかわりに金銭的な援助をしてもらう。息子がおおきくなって、約束の履行のために、黒山にあるという悪魔の城をめざす。途中、湖で羽根をぬいで水浴をしている白鳥娘たちをみて、そのうちのひとりの衣を隠す。娘は衣を返してくれば悪魔の城へ案内するという。まさに悪魔の娘なのである。城へつくと悪魔が難題を課す。「天人女房」と同じ農耕試練で、娘がかわりにかたづける。その間、階段がくずれて奈落へおちそうになったり、寝ているところへ、刃物がおちてきたり、さまざまな危険な目にあい、最後にこのままでは死んでしまうというので、娘とともに逃げ出す。ただし逃げ出すまえに、相手の娘をそっくりな姉妹のなかから選びだすという試練がある。認知の試練である。

逃げ出すときにやせた馬をえらべば速く走ったはずだが、立派な様子の馬をえらんで失敗する。悪魔がやせた足の速い馬でおいかける。つかまりそうになると、娘が魔法で変身する。池と魚、果樹園と農

夫、教会と神父などにそれぞれ変わって父親をかかわす。あるいは、品物をなげて障害物をつくりだす。櫛が森になり、スカーフが川になる。

やがてこの世との境にたどりつくとも悪魔はそれ以上はおいかけてくることができない。このあたりは日本のスサノオの神話と同じである⁷¹。

ヨーロッパでは、艱難辛苦のはてに、女房に再会した400番の男は、女の父親、あるいは、女をさらっていった鬼の課す試練を無事きりぬけて、平和的に女をつれて帰還する。313番では、鬼の課す難題をきりぬけたあとも、鬼が許さないで逃走する。中国でも天で、舅と戦って、これを打ち殺す話が「牛飼いダリエ」である。天の舅が悪役である。400番でも、王女をさらっていった魔法使いは悪役で、物語によっては、途中でひろっていった無敵の剣で、全員の首をはねてしまったりする。これは日本の「天人女房」では明示されないことで、娘の父親は意地はわるくとも悪人とはされない。

一般に日本の昔話はあっけない終わり方をするとされる。河合隼雄はそこに「別れの美学」があるという。じつはヨーロッパでは数十ページになるような話が日本では印刷をしても数ページにもならないことがおおい。日本の昔話は短いのである。ヨーロッパでは、主人公に禁忌が課され、それに一回ではなく、三回もくりかえし違反し、その結果、せっかく手にいれた王女をうしなった主人公は、そこであきらめてしまわず、ながい探索の旅にでる。日本では、「鶴女房」などだと、鶴がとんでゆくところで話がおわり、「天人女房」では例外的に、いなくなった女のあとをおいかける話になるが、せっかく天までおいかけていっても、そこで課された試練に失敗して地上におとされると、それっきりになる。これがヨーロッパでは一回失敗しても二度、三度とやりなおし、結局、最後には求めるものを手に入るところまで語らなければ満足しない。

そのあたりは「バスラのハッサン」でも同じで、いなくなった女房をさがして地の果てまで、あるいは天の上までさがしにゆき、天の舅などに難題を課されたり、あるいは妖精の女王によって殺されそうになる。そして一度ならず追い返されるのをなんとか切りぬける。そこでは、妖精たちの王、あるいはジンの王は、かならずしも悪役ではない。もっとも

天の至高神でもない。

1 天

すなわち、昔話の短さや、哀れや別れの美学があるというより、「天」という観念が日本では絶対的な権力を持った暴君とむすびついていて、それに抵抗することはできないとされるのである。アラビアやヨーロッパでも、絶対君主には事欠かなかったが、それでも、結局は市民が王政をくつがえした。日本では外圧によって明治維新がおこなわれたが、王政復古の革命であり、市民革命ではなかった。それまでの武士の支配に対しても、町人や農民が反抗するということは考えられなかった。「天」がいかなるものか、日本でははっきり認識されなかったとしても、「天皇」「天朝」「天帝」などいうだけで、おそろしいものと感じられ、その「天」の支配者が命令をくだせば、地上の人間にはいかようにも逃れるすべはないという「あきらめ」があったにちがいない。そこから、物語が悲劇でおわるのに対し、ヨーロッパでは最後までがんばって、主人公が求めるものを手にいれなければ物語がおわらないのだった。ヨーロッパのAT 401「居なくなった女房をさがす男」の話も、禁忌背反の結果、王女をうしなった主人公が地の果てまで王女をさがしにゆき、王女を奪って行った「魔法使い」を打ち殺して王女をとりもどしてくる。人間の幸福を阻害するものは打ち倒すべき悪であり、敵なのだ。

このタイプの話が日本でもないわけではないのは、鬼退治の話ならいくらかでもあるからであり、「梵天国」もそのひとつにはちがいない。水や食べ物をやってはいけないという禁忌を忘れて、とらわれの鬼に水あるいは米などを与えたために、いましめをやぶって逃走した鬼が天人女房をうばってゆく。それを梵天国までさがしにいった主人公がなんとか女房をつれて逃げ出してくる。

ただそこでも、鬼を殺して女房を連れ戻すのではなく、鬼のいないまに逃げ出すのであり、逃走の途中で鬼においつかれて、あわやというところを「天」からガリョウビンガがおりてきて、鬼をけちらしてくれるので助かるのである。あくまで、天の力に左右されているのである。かぐやひめも「天」の命令で昇天する。ヨーロッパにはこのような命令をくだす「天」の絶対支配者がいないのである。

「天」が絶対力をもっているということでは中国

も似ており、牽牛織女の話では天の命令が絶対で、ふたりは7月7日にしか会えないのである。これは日本の「七夕型」の「天人女房」でも同じである。ところが、ミャオ族の「牛飼いダリエ」では乱暴な天の支配者をダリエが撃ち殺してしまう。そのあたりは漢民族と南の少数民族のちがいかもしい。

この「天の支配者」というのは、中国では地上の皇帝とおなじような権威者となっているが、日本ではそれが地上にいて、しかも「天」にもその観念の投影のようなものが不可視の存在としているかのように思われていた。そのまえには、天神といえば雨神で、道真が天神になるまえの原初的な天神信仰では、雨乞いをする相手の神さまだった。ただそれは高天原系譜では明確に指示されない神であり、中国の道教でも儒教でもはっきり名ざされない自然の要素の神格化だったが、庶民の想像では雷とむすびついて、どこか滑稽でありながら、おそろしい神として漠然と想像されていたようだ。ちなみにロシアでは「海の皇帝」である。またインドネシアでは天でも悪魔でもなく、たんに異類と人間は一緒になれないといった宿命感であることがおおい。なお、悪魔の娘は「古くは信仰の対象の神々の一族の一人だったのであろう」（長野 30p）とされる。

2 主人公の職業 物語の文化的背景

主人公の職業は中国の話では牛飼いがおおいのだが、日本の「天人女房」では犬をつれた猟師であり、あるいはやはり犬を飼っている農夫である。鹿児島に牛飼いの例がひとつあるが、熊本では犬飼であり、ほかは、きこり、農夫、漁師とさまざまだが、多いのは静岡より北の漁師10例である⁷²。つぎが西のほうで猟師、犬飼で8例、農夫が8例（西日本で7）、きこり・炭焼きが4、商人が1、である。臼田甚五郎ほか、おおくの国文学系統の昔話研究者は羽衣を稲束のなかに隠すことがおおいので、稲作文化にかかわりがあると見ているが⁷³、この職業の分布を見てもあまり稲作的ではない。喜界島で稲だが、沖縄は倉、長持ち、沖永良部は粟、熊本で藪、長崎が櫃、徳島が大黒柱、山口がかまど、広島がたんす、岡山が庭の隅、京都が大黒柱、愛知が石櫃、新潟も唐櫃、埼玉大黒柱、山形唐櫃、岩手、花 畑のなか、青森で松ノ木の下という具合で、大黒柱に穴をあけてというのがおおく、石の唐櫃もある。これは外国からの輸入ものだろう。稲は一例であり、穀物でも焼畑

の粟があたりする。難題も農耕試練だが、山の木を切って、焼き払って畑にしろとういうのがおおく、そこにまくのも蕎麦や粟などである。稲作より、焼畑文化である。あるいは狩猟、漁労である。しかし隠し場所から言うと、稲束は白田の主張に反してすくないが、とって焼畑や狩猟文化的ともいえない。なにしろ大黒柱などというものは定着農耕文化が相当すまなければうまれてこない。石の唐櫃などというものは、日本ではめったに使われていなかったろうから、外国の話の直訳ともみられるし、それも南の方より、朝鮮、北中国のほうの石文化からのものとも思われる。とすると、ついでに牛飼いはいつてきてよさそうなのあまり見られないのは、石櫃を使っても、牛を飼わない文化圏からの輸入話だということになるかもしれない。

長崎には牛を千頭埋めて南瓜をそだてるというモチーフがあるが、男の職業は牛には関係のない木挽きである。小南は中国でも牛と犬が交錯していると見、たしかに狗耕田伝承など、犬が牛のかわりになる例はあるが、一般には牽牛であり、さらに牛を殺して天にのぼることがおおいのである。日本でも殺牛祭がおこなわれていたというが、物語に影をおとすほどではなかったようである。殺牛祭にしても海外からの輸入文化だったようで、日本の文化における牛への依存度はやはりすくなかったのだろう。なお、「白鳥処女」では、バスラのハッサンは商人、マノーラは王子、プルーラヴァスは王である。ヴィーラントは鍛冶師である。「悪魔の娘」の主人公はフランスでは無職の青年であることがおおい。グリムの「王様のふたりの子」は王子である。

3 物語の神話的機能 雨乞い 天神信仰

「天人女房」ではないが、天へのぼっていった男が失敗して地上に落ちる話では「源五郎の天のぼり」がある。「天人女房」でもいくつかゲンゴロウという名前が出てくるが、こちらのゲンゴロウの話も七夕に関係があり、「天人女房」との関連は否定できない。まず市場でナスを買ってくるとぐんぐん伸びて天に達する。実をとりてのぼってゆくと天の御殿につき、雷神の娘たちに歓迎される。雷神はゲンゴロウに雨をふらせる手伝いをさせる。これは「三つの試練」に相当するだろう。ところが、一緒に雨をふらせている娘たちが夢中になって肌をちらつかせて雨踊りをおどっているのを見て、ゲンゴロウがお

もわず足をふみはずす、あるいは水桶をひっくりかえして大水になって一緒に地上におちる。天まで達する植物、天神の娘、「三つの試練」と試練での失敗、大水と「天人女房」とおなじ道具立てで、天神の娘とも別離におわるところも同じだが、こちらは笑い話したてである。

笑い話になっているが、それでも天の神が雨をふらせる神であること、ゲンゴロウの失敗が大水をだすことであるのは示唆的だ。AT400-401でも、AT313でも、あるいは「白鳥処女」そのもののAT400-Cでも、ヨーロッパの話では雨や大水の話は出てこない。呪的逃走の際に川をつくりだす話はあるが、境界、あるいは障害物としての川であり、氾濫する川ではない。日本やエジプト、あるいはインドでは水神の性格があるカエルが登場しても、ヨーロッパではとくに雨をよぶ動物とはされない。

「天人女房」に稲作文化の影響をみることは当をえていないことはすでにみたとおりだが、雨神信仰の色彩はありそうである。まずゲンゴロウの話はかならず雨をふらせることになる。天人も雨神、あるいは雷神の娘である。「天人女房」では瓜を切って大水をだす。最初の水浴も雨に関係があるかもしれない。水浴する天女は雨をつかさどる天女とも思われる。ヨーロッパでは白鳥であれば水浴をしているが、鹿や猫だと水浴のモチーフは出てこない。AT313の悪魔の娘は水浴をしていることが多いが、その父親の「悪魔」には雨神の性格はみられない。これは乾燥農業地帯と湿式農業地帯の違いともみられるが、おなじ湿式農業地帯の東南アジアでは、水浴のモチーフはおおいが、最後が大水になることはめったにない。中国でも牽牛織女の民間版では（『中国民話集』）7月7日に雨がふるとふたりは会えないという。これは日本でもいわれていることだが、7月7日に雨がふることは嫌われているのであり、雨乞い儀礼の反対である。

日本には断片以外、はっきりした洪水神話はないといわれる。それにたいして、村の昔話のレベルでは「蛇の目玉」のように、大水が出て村が水没する話はよくある。池の主の竜が大水をおこすのである。雷神は地上では竜神である。大水をおこす池の主の竜と、天上から雨をふらせる雷神は同じはずである。雷神の娘であれば、ヨーロッパでは悪魔の娘となるだろうが、中国、日本では水底の竜宮の乙姫であることもある。竜宮の乙姫というのなををする「神」

か浦島などの物語は明示しないが、竜の娘であれば、水を司るのである。天上では雷神の娘で、肌をちらつかせて、雨をふらせる。海底では竜宮の乙姫として、やはり水のサイクルを司っているのである。

フランスの白鳥処女型AT400-Cである「ピピ・ムヌー」では、ピピという名前の少年が主人公で、ピピというのは小便のことだから、洪水などのモチーフと関係があるかと思われるところだが、事実はまったく逆で水は最初の池のところ以外に出てこない。雨、洪水のモチーフが日本特有であるとみられる。

4. 植物霊信仰、世界樹

その大水をだす瓜、天へのぼってゆくときに使う蔓性の植物（瓜、南瓜、朝顔）も、中国でも東南アジアでもあまり見られない。インドネシアの「ポロパタン」では地の果てまで行ってそこから天にのぼる。「天国の王女」では梯子が天からおりてくる。ママヌアは鳥、ついで魚が天、あるいはその戸口までつれていってくれる。

瓜や南瓜が日本の食物生産の主要な産物であったはずはない。とくに南瓜は近世になってからもたらされたものだ。天までとどく植物では竹が中国の狗耕田などでは使われる。が、瓜は日本できわめて普遍的であるのにもかかわらず、中国でも東南アジアでも出てこない。瓜、南瓜、夕顔、きゅうりなどのほかには広島で松、鳥根でほうの木、鳥取で「ぼうふらの木」がある。

天の畑では粟を植えている。そして瓜畑がある。そこから水が出る。メロンを切ると水が出るというモチーフはトンプソンのモチーフインデックスにもない。日本独特なのである。関の『大成』でも日本全国に二〇例ほどみられる。瓢箪にのって洪水を逃れる話は中国でもあるので、その影響かとも思われるが、いずれにしても瓜も大水もこのタイプの話では日本独特である。韓国では南瓜を植えるのは同じだが、途中でふりかえって見たために二回失敗し、三回目に成功する。三つの試練、三晩の試練、三回のおそろしい接吻などとおなじ、三つの試練である。韓国にはまた天郎をしたって瓢の蔓をつたって天へのぼる女の話がある。この話は依田千百子が紹介している⁷⁴。

5. 不思議な眠り、記憶の喪失

AT 3 1 3では、主人公が国に帰って家族と接吻をすると、一緒ににげてきた悪魔の娘のことを忘れてしまう。『竹取物語』で天女が羽衣を着たとたんに人間的な感情をすべて忘れてしまうのと同じである。忘れられた許婚は三晩、王子の寝室にはべって話しかけるが王子は眠り薬をのまされておきない。AT 4 0 1では、王女と逃げるためにまちあわせをするのだが、そのとき、禁じられていた食べ物を食べると、不思議な眠りに落ち込んで王女がどんなにゆさぶってもおきない。パシーレの『ペンタメローネ』の「ロゼラ」では、トルコの王女が宮廷を逃げだすときに、母親を魔法で眠らせる。この母親はその後、娘に呪いをかけ、王子に忘れられるようにさせる。眠らされた報復である。不思議な眠りは大抵は眠り薬による。アラビアでもヨーロッパでも、眠り薬は昔から知られていたようである。日本では昔はまったく知られていなかった。魔法自体がアラビア～ヨーロッパでは科学の先駆状態として開発されていたが、日本では、道満と清明の術争いなどがあるものの、おおむね子供だましのもので、化学的なものはなかった。

これに似たモチーフがAT 4 0 1にあり、魔法にかかっていた王女を救ったあと、王女がともに故郷へ帰ろうというので、待ち合わせをするのだが、そのとき、なにも口に入れてはいけないという。しかし主人公はついしらずにポケットの麦粒を食べてしまっている。あるいは、魔女が勧める食べ物に手をつける。その結果は、そこで待ち合わせの時間に眠り込んでしまう。王女はそれをみて、そのまま馬車をはしらせる。

それまでの生活の記憶を失うというモチーフは『竹取物語』で、羽衣を着た天女が地上のことを忘れるというモチーフにみられる。ヨーロッパの「あざらし女房」や「白鳥の後グルペー」などでは、アザラシや白鳥の群れのなかに女の許婚がいる。これはその許婚から言えば、地上へ行った女によって忘れられてしまったのだ。しかし、アザラシの皮や白鳥の羽を着ると、もとの感情をとりもどす。

6. 三つの試練

日本の「天人女房」にはほとんど例外なく「三つの試練」が出てくる。これはAT 3 1 3と共通し、日本ではほかの昔話には出てこない。『竹取物語』に類似のモチーフがあるということがあるが⁷⁵、『竹

取物語』は女のほうから出した難題で、試練ではない。不可能な難題を課するのは、求婚者をしりぞけるためである⁷⁶。「絵姿女房」で、殿様が天人女房の夫をとおざけようとして難題を課するのも、不可能な難題で、それを天人は解決してしまうが、本来、通過儀礼として、それをやり遂げることによって新しい人格になるべき試練ではない。

「天人女房」「悪魔の娘」に共通してみられる三つの試練は、死の危険と同時に与えられる。ヨーロッパの物語では、この種の試練や危険が目白押しで、それもなんどもくりかえされるのに対して、日本の物語では試練でもそれに失敗すれば命がないというような緊張感にとほしい。ヨーロッパでは、「もし、今晚までにこの森全部、切りひらいていなかったらおまえの命はないものと思え」というような具合になる。日本では、それができなかったら、天女と添うことはあきらめてもらおうというだけで、結果はずっと軽い。またそれが三回くりかえされるのは東西で同じだとしても、ヨーロッパではその三回の試練が二度、三度くりかえされる。たとえば「悪魔の娘」では、まず主人公が悪魔の城で三つの難題を課される。森を切り開き、そこに種をまき、その日のうちにかりとることなどという。それと平行して、スサノオの蛇の室に相当するような危険な寝室で夜をすごさなければならない。階段がくずれて奈落へおちる。寝ているところへ刃物がおちてくるなどである。生命の危険がおなじく生命の危険をとまなう試練と平行して与えられる。

命の危険のほうはスサノオのところへ行ったらオホアナムチの話にみられるが、農耕試練のほうはスサノオにはない。同系の「梵天国」「青葉の笛」あるいは「絵姿女房」にもない。難題としては、「絵姿女房」は「打たぬ太鼓のなる太鼓」「灰縄三把」「なんじゃもんじゃ」などで、農耕試練もないことはないが数例にとどまる⁷⁷。悪魔の城へかけてゆくのは、「梵天国」では「梵天王の自筆の判」をとりにつくのと、そのあと、女房をさらっていった鬼の城へゆくことがそれに相当する。悪魔のところから呪的逃走によって逃げてくるのは、一部「梵天国」「鬼の子小綱」にもあるが、イザナキの話であろう。「天人女房」には出てこないが、地上へおとされるのがどちらかといえば逃走に相当しないでもない。

これらの中国の「白鳥処女」型昔話を分類して君

鳥は「七夕型」「難題型」「七星始祖型」にわかれるとしている。(『昔話研究集成』)。日本の『天人女房』もほぼ同じだが、だいたい農耕文化を思わせる試練を課される。そしてその最後に失敗するのである。

7. 禁忌

天の畑で瓜を切ってはいけなかった。その禁忌を犯して地におちる。しかし、天人に衣をみせてはいけなかったのに、つい、もういいだろうと思って衣をみせたとたんに天人がそれを着て天にのぼるといのは、禁忌ではない。すくなくとも天人のほうから課されていた禁忌ではない。ウルワシは「裸身をみせてはいけない」という禁忌を課していた。AT 400では「見るな」、「言うな」などの禁忌が課される。それらにくらべると、瓜をきってはならないといのは、禁忌より、忠告で、それを忘れたのは禁忌背反より、失策である。蛙王女に水を見せてはいけなかったのに、つい水のほとりにゆくと、とたんに蛙になって水にとびこんで見えなくなったというインドの話は、禁忌である。「三つのオレンジ」で、オレンジを切って妖精が出てきたら、すぐに水をのませないと死んでしまうといのは、禁忌ではなく、妖精を手に入れる条件である。AT 400はメリュージュ型の禁忌に守られた異類婚姻の物語である。「悪魔の娘」では、地上へもどるまではとくに禁忌は見られない。地上にもどったとき、だれとも接吻してはいけないといのは、女のほうで、それをされたら、自分と一緒にいられないといっって課した禁忌、いわば、愛情の証明として、一見不合理な、あるいは無意味な禁忌を課し、それを守るかぎりは一緒にいようという禁忌ではない。「天人女房」では、天人に衣を見せるという失策をおかした結果、天人を失うが、わらじ千足などの試練をのりこえて、天に達する。そして二度目の試練として、瓜を切ってはいけなかったのに、その言いつけにそむいて天人と天の川で隔てられる。禁忌というほどのものではなく、失策であり、それによって、この世と異界でへだてられるのである。この世と異界をへだてる境でのドラマで、主人公の失策のために隔てられるということでは「天人女房」「牽牛織女」そして「悪魔の娘」は共通している。禁忌は女が課した条件で、それにそむけば女が去るというものと考えれば、メリュージュ型の展開をするのはAT400で、「天人女房」にはそのような禁忌はない。「悪魔の娘」の接

吻の禁忌も、娘が、みずからの愛の条件としてだした禁忌ではないので、メリュージュ型の禁忌譚とはいえない。

7. 援助者

韓国では鹿が援助者として現われる⁷⁹。異伝では兎のこともある。きこりが水浴中の天女の羽衣を隠す。天で妻子と楽しく暮らす、地上の母にあいにゆくとき、竜馬からおりてはいけないという禁忌にたいして、落馬して地上にとどまる。中国ではカササギが助けてくれる例がある。動物報恩で、日本では「鶴女房」「浦島」などでかならず使われるモチーフだが、「天人女房」ではまず出てこない。動物モチーフはAT 400番の「鹿王女」などでは、鹿を助けるのである。日本では犬が出てくる。まず「余呉の海」で羽衣をとってきたのが犬であり、その後の「天人女房」では、たいてい犬をつれて天にのぼる。犬は一般に世界の昔話でもっとも有益な伴侶ではあるが、このタイプでは犬が出てくるのは日本や中国だけである。山本節によると「犬が人の守護獣として観想されていた」(『神話の森』509p)という。しかし福島の場合のように、漁師が犬をつれている話では、犬がなんのためにいたのか不明である。ほかに狸が出てくる例を柳田は山口で採集されているといっている(『定本』6-425p)。動物ではなく、老人などが助言をしてくれることが外国ではあるが、日本の「天人女房」ではそれも稀である⁸⁰。一般に「天人女房」の主人公は家族、友人、隣人などのいない独り者として語られる。

8. 変身

「鶴女房」などにみるように、「変身」という観念は日本でも存在する。「余呉の湖」もその例である。しかし、「鶴女房」は、美しい女房が動物になってさってゆく。中村禎里のいう「疎外型」変身である⁸¹。小沢俊夫などもその変身の方向が、「美女と野獣」などとちがひ、西洋では動物が人間になるという。実は一概に変身の方向が違うと言えないのは、まさに「余呉の湖」では白鳥が人間になるのである。「鶴女房」も鶴が人間になってくる。ただ、「鶴女房」のばあいはその最初の変身の場が目撃されていないだけである。それに、「美女と野獣」などと野獣に対して献身的な愛情をそそぎ、「おそろしい接吻」をすることで、魔法を解除する。まず、魔

法という人間的なプロセスが機能しており、ついで、それをさらに人間が努力して、人間的秩序にひきもどす。「鶴女房」などでは、女が鶴になるのは、人間が見るなどという禁忌をおかしたからで、努力ではなく、失策である。人間のほうで変身を助けるのではなく、自然に鶴になる。あるいは、人間であったのが、ありえない驚異であり、ちょっとしたことで、その奇跡がやぶれるのである。

「白鳥処女」譚の中心的なモチーフは変身である。白鳥が羽をぬいで人間になる。天女のばあいは、変身ではなく、着衣の着脱で、空をとぶ天女と、とべない人間に変化する。アプサラスだと人間の姿だが、翼をつけていて、水浴のときはそれをとる。「牽牛織女」には変身のモチーフはない。「天人女房」では羽衣の着脱が変身に当たるかどうか微妙である。しかし、羽衣を着ると空を飛べるようになるのは、羽衣に飛行装置があるのではなく、女自身が飛行能力をとりもどし、空をとぶ種としての天人になるのである。記憶の喪失と回復も、別な存在になったこととも考えられる。

「白鳥処女」と同系のヨーロッパの話では、アザラシが水中では皮を着ていてアザラシになり、陸に

あがると皮をぬいで人間になる。ヨーロッパでは人間中心の世界観に支配されているから、動物の姿は中村禎里の言う「疎外態」である(『日本人の動物観』海鳴社)。神罰や呪いで動物になる。洗礼式によればなかった妖精が呪をかけて王女を鶯鳥にする。代母である妖精が言うことをきかない子供を蛙に変える。あるいは、魔法使いが魔法で、王女を動物にしてしまう。本人が魔法を使って鳥になったり人間になったりするのがAT313である。これによって「魔法の逃走」が実現する。

これをどうやって人間にするかという、「白鳥処女」では本人の自由意志で皮、羽をとれば人間になる。それ以外は「美女と野獣」のように、「おそろしい接吻」をして魔法を解除する。あるいは、三晩、悪魔に翻弄される試練にたえて、魔法をとく。このばあいは試練と変身解除が一緒になっている。

XVIII まとめ

ここでAT313とAT400、AT401、それに「天人女房」を比較してみよう。

		妖精	変身	禁忌	別離	試練	禁忌2	別離2	再会
白鳥処女	白鳥	水浴	(衣)	飛翔	なし	なし			
AT400	蛇	接吻	見ること	逃走	旅				○
AT401	鹿	三晩の試練	食物	眠り	待合せ				○
AT313	白鳥	水浴			農耕		接吻	忘却	○
天人女房	白鳥	水浴	(衣)	飛翔	農耕	瓜を切る	大水	別離	
牽牛織女	天女	(水浴)	衣	離別	(農耕)				
梵天国		天女		水をやる	離別	鬼退治			○

これで見ると、「天人女房」とAT313は後半部分の「三つの試練」が共通であり、禁忌とその結果としての別離の場所がちがっていても、いずれもそのモチーフをふくみ、最後が別離のままか、再会かの違いがあるだけということになる。

男が天までいかないばあいは、天人が白鳥ではなくとも、ふつうの白鳥処女譚とかわらず、動物種がちがえば、AT400や401とも共通する要素がおおい。(手にいれた妖精を禁忌背反の結果失う) = (手にいれた天人を、衣をみせたために失う)。そのばあいは、禁忌のモチーフが日本では弱い。

しかし、後半の天のぼり、天での試練、瓜を切る禁忌をみれば、こちらはAT313の完全話に近いことがわかる。白鳥妖精を手に入れるプロセスは同じである。天の父親、あるいは悪魔から課される「三つの試練」はほとんど同じ農耕試練である。娘(天人、悪魔の娘)がそれを手伝うのも同じで、そのご、してはならない接吻をして悪魔の娘のことを忘れ、ふたりが離れ離れになるのは、切ってはいけない瓜を切ってはなればなれになるのと同じだといってよい。「悪魔の娘」という言い方は日本に移植されるには違和感があるが、アアルネ=トンプソンの

分類では「魔法逃走」であり、ロシアでは「かしこいワシリサ」、カナダでは「麗しのウラリー」などで、異界の女を悪魔の娘とよぶのはキリスト教ヨーロッパの特殊性である。日本、中国ではせいぜい「鬼」か、あるいは「竜王」くらいであろう。また、その日本、中国では「天人女房」の舅も、「天の神」などではなく、鬼のように意地のわるい頑固爺である。この舅のキャラクターはAT 313と「天人女房」では一致している。

その上で違うのが、結末の幸・不幸であり、冒頭の契約の有無、そして戦うべき相手が天の父親か、悪魔かの違いである。さらに、日本の特徴として大水がでること、瓜をつたって天にのぼること、犬が出てくるのがあげられる。

結末が不幸であることは、日本の昔話の一般的特徴としてあげられていることである（小沢俊郎『世界の民話』ほか）。世界の昔話はハッピーエンドを原則とするが、日本では別れで終わることが少なくない。幸せな結末まで不撓不屈の意思をもって試練をたえぬくのがヨーロッパの昔話であり、日本では宿命観が強く、不幸を簡単にうけいれてしまう。契約の有無も社会的、文化的な相違からきており、物語の違いではない。相手が天の父親か悪魔かという違いも宗教観の相違から来ている。大水伝承は中国の天の川伝承の影響とも見られる。また、雨乞い儀礼の名残でもありうる。瓜は、中国ではすくなく、成長の早い植物が天との交通の手段となるのは、南方要素ともみられるが、実際は東南アジアの「白鳥処女」譚では、瓜も植物一般もあまり出てこない。しかしインドネシアの昔話では「瓜女房」がある（ヤン・デ・フリース『インドネシアの民話』）。瓜の種を植えるとあつという間に芽が出て、花が咲き、実がなって、そこから女が出てくるのである。南中国の「狗耕田」では竹がのびて天に届く。もちろんイギリスの「ジャックとマメの木」もあるが⁸²、異常な成長をする植物のモチーフは南方系とみられる。桃太郎、うりこ姫などととも、日本の昔話の植物系統のモチーフのひとつである。あるいは、東南アジアの洪水伝承では、兄妹が瓢箪にのって逃れる。瓜姫、桃太郎などの瓜や桃は竹などとおなじく、ちいさこを入れる容器である。中空の容器で、その典型が瓢箪だが、瓜はその代わりをイメージしよう⁸³。また、七夕伝承との結合から、その時期にできる果実としての瓜が出てくるともいえる。洪水伝

承に結びついた植物であり、成長の早い蔓性、あるいはマメ科の植物に霊異をみる思想が関係している。洪水ではなくとも雨乞いには関係のある伝承だから、雨乞いに関係のない世界の伝承が日本では雨乞いに関係づけられて定着したとも考えられる。

犬はやはり日本の昔話の「動物の援助者」として出てくる頻度の高い動物で、桃太郎の家来になる犬、雉、猿の一つであり、「犬婿」の話もある。ヨーロッパでよく語られる「忠義な犬」も日本でも伝承されており、空海伝説では狩場明神の犬も出てくる。日本における「白鳥処女」の最初の話のひとつである「余呉の湖」伝承で、犬が羽衣をとってくるという語り方がうけつがれてくる可能性もある。いずれにしろ、瓜と犬は、日本でとくに強く伝承され、この種の話では、外国では出現頻度がすくないだけに⁸⁴、この「天人女房」を手がかりに日本の文化の特性を考えてゆくときには重要な手がかりになるであろう。ここでは、昔話の比較で「天人女房」が中国の「牽牛織女」のモチーフや世界の白鳥処女の話のほかに、国際話型の「悪魔の娘」に近い性格をもっていることを検証するにとどめたい。

「白鳥処女」説話が日本に伝播していることは、「余呉の湖」伝承であきらかである。「7羽の白鳥が羽をぬいで人間になって水浴する。そのうちのひとりの羽をとって女房にするが、天女は羽をとりもどして天へ帰る」という、この物語の筋は世界中に流布する「白鳥処女」説話と完全に同じで、伝播には疑問の余地はない。「天人女房」がこの「白鳥処女」から出ていることも間違いがない。前半部は「白鳥処女」をそのままうけついでおり、後半に天へのぼり、試練をうけ、大水が出て、流される。そこで、7月7日にあおうと言ったというところは、もちろん七夕伝承の中国からの伝承に關係しており、すくなくともこの「七夕型・天人女房」については、「白鳥処女」伝承に、中国の七夕伝承、とりわけ「牽牛織女」伝承が接続したものと考えられる。伝播の順番としては、8世紀に記録された風土記の「余呉の湖」伝承に「牽牛織女」の部分をふくまない以上、その後で「牽牛織女」伝承がつたわったものとみられる。これには文献による書承伝播の可能性も高い。しかし、「天人女房」にみられる「呪的逃走」と「三つの試練」は、古い文献である『荆楚歲時記』などにはみられない。このふたつのモチーフは国際的な昔話のモチーフで、中国、日本とともに外国から伝

播したものとみられる。日本ではそのふたつが『古事記』に採録されたイザナキ神話やスサノオ神話に見られるところから、『白鳥処女』伝承とおなじころに外国から伝わったと見られる。そしてこのふたつのモチーフをふくんだ昔話はAT 313の「悪魔の娘」であり、これを、「悪魔」の観念のない日本で、「鬼の娘」あるいは「天界の娘」として理解すれば、まさに「天人女房」である。AT 313番話にみられるその他のモチーフである変身、禁忌、背反、義父による婿の殺害計画、天女による援助などの共通性をみると、この話のいずれかのヴァージョンが日本に伝わった可能性がうかがわれる。「天人女房」のモチーフである、瓜、大水、犬などや、ハッピーエンドではない終わり方については、日本の物語特有の法則やモチーフとの融合と考えられる。すなわち「天人女房」は世界的な「白鳥処女」と中国の「牽牛織女」、そしてやはり世界的な「悪魔の娘」がそれぞれ時代をおいて、伝わってきて、日本で融合し、そこに日本の風土にあわせたモチーフを付加して成立したものであることが、この比較検討において結論される。問題はAT 400系の展開をせず、AT 313系の方向にむかったこと、そして、日本特有の瓜、犬、大水のモチーフが加わることである。この問題を今後の検討の課題としたい。

1 「近江国風土記逸文」。「余呉の湖」伝承とする。とくに題名のある伝承ではないので、以下、適宜、「余呉の湖の話」「余呉の湖伝承」などとする。『余呉の民話』（余呉町教育委員会、1980）などにおさめられているものは、この風土記逸文の書き直しである。吉野裕『風土記』などでは、「伊香の小江」と題している。民間伝承では「天人女房」として語られる。「風土記逸文」は以下のような記述である。古老傳曰。近江國伊香郡與胡郷伊香小江、在郷南也。天之八女、俱為白鳥自天而降。浴於江之南津。于時、伊香刀美、在於西山。遙見白鳥、其形奇異。因疑若是神人乎。往見之、實是神人也。於是伊香刀美、即生感愛、不得還去。竊遣白犬盜取天衣。得隱弟衣。天女乃知、其兄七人、飛昇天上。其弟一人、不得飛去。天路永塞、即為地民。天女浴浦、今謂神浦是也。伊香刀美、與天女弟女共為室家、居於此處、遂生男女。男二女二。兄名・意美志留、弟名・那志等美。女名・伊是理比咩、次名・奈是理比賣。此伊香連等之先祖是也。母即搜取天羽衣、著而昇天。伊香刀美、獨守空床、吟詠不斷。（神宮文庫本『帝王

編年記』第十、元正天皇養老七年癸亥條）。『丹後国風土記』の天女の話はだいぶ異なる。倉吉の「打吹山伝承」の天女伝承は「余呉の湖」伝承に近い。

- 2 『日本昔話辞典』弘文堂ほか。
- 3 『日本昔話辞典』同上「白鳥処女」の項で「失踪した妻をさがす男」（AT 500）とあるのは、AT 400の誤記である。AT 500は「大工と鬼六」のタイプの「鬼のなまえ」である。ドラリュとトゥネーズの『フランス民話目録』ではAT 400-Cを特に白鳥処女としている。アアルネ＝トンプソンはAT 400*をSwan Maidenとしている。AT番号はArrne, Anti & Thompson, Stith 1961 *The Types of the Folktale*, FFC, 184の分類番号。フランスの目録も同じ番号を使う。ただし、話型の名前は国によって異なる。
- 4 関敬吾の「天津乙女」もほぼ同じ範囲をとりあげる。『関敬吾著作集・2』。国文学では、一般に昔話の話型分類は無視して、『竹取物語』、昔話の「天人女房」「鶴女房」などを関係させてとりあげる。関根賢司『竹取物語論』おうふう、2006もそのひとつである。『竹取物語』を天女の降臨と昇天の物語とすれば、「天人女房」の類話ともいえないかもしれないが、竹の中の誕生と、複数の求婚者への難題とは、白鳥の変身と、「天人女房」にみられる天の父親がだす難題とけっして同じではない。
- 5 とくに柳田以来、「絵姿女房」がそこに含まれるが、これは国際話型AT 465番「うつくしすぎる女房」であり、白鳥処女譚や「天人女房」に接続することがあるが、本来は別の話である。
- 6 デュメジルはその比較神話学研究において、「インド・ヨーロッパ神話」がひとつの根幹から派生していることを示した。吉田敦彦はそれを発展させて、日本神話もそのユーラシア神話の流れに属することを示した。本論は狭義の「神話」より「昔話」をふくんだ広義の「神話」を比較し、隠された相互関係を抽出することをめざすものである。神話でも昔話でも、世界各地に独自にうまれたものではなく、伝播しているものであることは前稿でも述べたが、その共通の根幹からでた各地の伝承がどのような地域的偏差をしめしているかを調べることで、それぞれの地域の文化特性をしる手がかりがうまれるのである。
- 7 アアルネとトンプソンによる国際昔話話型分類番号。FFC 184, 1973 *The Types of the Folktale*
- 8 たとえばコックスの「シンデレラ（AT510）」研究（Marian Roalfe Cox, *Cinderella*, London, 1893）など

- がそれである。
- 9 文献説話においては、年代の確定が必要であり、それぞれの影響などを論ずるには当然、時代的前後関係を明確にしなければならないが、超時間的な伝承である昔話では、成立時期を特定することは不可能である。神話も長い年月にわたって語られてきたものが、ある時期、文章化されるのであり、テキストや作者を特定できるものではなく、ひとつの文化が代々うけついできた「伝承」である。たとえば、ドラリュの『フランスの昔話目録』では、16世紀から20世紀までさまざまな時代に収録された伝承が地域別に集められている。昔話、神話の「超時間性」、「集合文化性」は、個々のテキストの年代や表現などの比較を無意味にする。
- 10 ここでは日本でよく語られる「天人女房」が、世界的な「白鳥処女」説話の枠をはずれたところで、とくにフランスでよく語られる「悪魔の娘」とモチーフを共有するところに注目する。
- 11 昔話の多くは世界的にひろまっいて、国際話型分類がなされている。そのなかでも「白鳥処女」説話のもっとも普遍的でどの地域でも語られているといってもいい。西村真次「白鳥処女説話の研究」『神話学概論』早稲田大学出版部、1927。これと対応するとされる日本の「天人女房」は「ほとんど全世界に分布する」（関敬吾『日本昔話大成』2、256p。
- 12 リトアニアの「グルペー」では、としより夫婦が白鳥を手なづける。白鳥は人間の姿になって老人の世話をする。老人が羽根を燃してしまい、娘は白鳥にもどれなくなる。やがて王様が娘を見初め、后にする。王子がうまれる。しかし白鳥の両親と許婚がグルペーをみつけ、羽根をなげる。それを身につけてグルペーは白鳥の許婚のところへゆく。しかし、許婚は死んでしまう。グルペーは王様の城へ舞い戻ってこっそり王子の世話をする。王様がそれをみつけて白鳥をつかまえる。白鳥から人間への変身が二度くりかえされる。子供の養育のために夜毎もどってくるというのは、妖精メリュジヌの話と同じである。ここには「いなくなった女房をさがす旅」のモチーフはない。王様は白鳥がもどってくるのをまっているだけだ。この話では日本の「余呉の湖」の話とさして違わない。ただ日本では「羽衣」という観念が定着しており、ヨーロッパでは鳥の羽であったり、アザラシの毛皮だったりするという違いがある。もうひとつは日本の「羽衣」とちがって、一旦去った白鳥がもどってくることだ。
- 13 岩本裕 1974 仏教聖典選 2、東京 読売新聞社 タイのマノーラとストーン王子の話はその異伝だが、吉川利治が紹介している。（「タイ族の羽衣説話再考」）
- 14 辻直四郎『古代インドの説話』春秋社、1978、岩本裕『インドの説話』紀伊国屋書店、1994
- 15 『インドネシアの民話』『アジアの民話』大日本絵画、1978、『インドネシアの民話』法政大学出版局
- 16 「七夕」「羽衣」「白鳥処女」をわけることもあるが、たとえば稲田浩二編『世界の昔話』〔三省堂2004〕では「牛飼いと織姫」の話、『白鳥処女』とする。
- 17 君島久子「中国の羽衣説話」『昔話研究集成』ほか。
- 18 小南一郎『西王母と七夕伝承』平凡社、1991
- 19 吉川利治「タイ族の羽衣説話」『世界口承文芸研究』第4号、大阪外国語大学1983
井本英一「羽衣の話」『世界口承文芸研究』第2号、大阪外国語大学1981
- 20 Grange, Isabelle : Essai d'interprétation de certains personnages ornithomorphes du folklore français, Thèse EHESS, 1981
- 21 これは後に言うようにこのタイプのフランスの言い方である。『世界の民話』ぎょうせいでは『主人公の逃走を助ける少女』となっている。
- 22 ヨーロッパの例では上村くにこ『白鳥のシンボリズム』御茶の水書房、1990がある。フランスの昔話ではSébillot, Paul, Le folklore de France, のほか、とくにIsabelle Grange, Essai d'interpretation de certains personnages ornithomorphes du folklore francais, 1981 (HESS, 学位論文)を参照。ひろくはIn search of the swan maiden : a narrative on folklore and gender / Barbara Fass Leavyなど。
- 23 ダグラス『スコットランドの民話』古典文庫、1977
- 24 日本では『古事記』や『風土記』いらい、白い鳥を「白鳥」とよび、種としてのハクチョーか、鶴か、あるいはその他の白い鳥か不分明であることがおおい。しかし、脚の短い白鳥と細長い脚が特徴の涉禽類は象徴的にも異なっている。嘴の形も違うし、鳴き声も違う。体型、食性ではコウノトリのほうが鶴に似ている。
- 25 「鶴女房」は人間に助けられた鶴が恩返しに女房になってやってきて、見ないでくれといっって不思議な織物をおるが、その姿をみられると去って行く話だから、「白鳥処女」のように、羽をとって変身するモチーフ、羽を隠して女房になることを強制する話、その羽をとるもどして去って行く話をふくまない。
- 26 秋田では「鳥の姉御」という話が伝承されているが、

- 産土の社の鳥が女房になってやってくる。ただ、そのさいの変身の仕方、その後の行動形態などはあきらかに白鳥の場合とは異なっている。
- 27 1394年にジャン・ダラスによって書かれた『いと高貴なるリュジニャン家の物語』に記されたフランスの伝説。妖精メリュジューは土曜には蛇の姿になる。それを人にみられてはならなかった。レモンダンが土曜には彼女をみないという約束で彼女を妻とするが、あるとき禁をやぶり、妖精に去られる。異類婚姻譚のひとつの典型として世界的に「メリュジュー型説話」とされる。
- 28 Half-Lancner, Laurence : la Fée au moyen âge, Champion, 1986
- 29 Comehair-Sylvain: Contes haitiens, Sorbonne, 1925
- 30 「鶴女房」に見られる動物報恩譚、致富譚の語られる頻度が高いことは日本の昔話の特例である。傷ついた鶴を助けてやったとか、畏にかかった鳥、捕まった亀を放してやったという種類の行為があつて、その見返りとして、異類女房がやってきて、鶴の織物のように物質的な報恩、あるいは「支払い」をするというのは外国ではすくない。妖精と結婚すれば富みさかえるが、それを妖精に対しておこなった医療行為の謝礼のように語らない。お礼に女房になってやってくるという発想もヨーロッパではない。いずれも愛や親切といったものを物質的に計量して取引するように受け取られる。
- 31 いずれも数ページからものによっては数十ページになる物語として語られており、一編だけでも全部を紹介することはいたずらに冗長になる。
- 32 この禁忌の点を重視すれば、日本の「鶴女房」も同じ系列につらなる可能性はあるが、出会いと変身の状況はやはり異なる。「白鳥処女」では、天女がむしろ畑をあらしたりする存在で、それを捉えて、結婚を強要する。
- 33 伝承により、ラクダ、あるいは牛になっている。最新のフランス語版〔プレイヤード叢書2006〕によると馬である。
- 34 世界的な「白鳥処女」伝承とは別個に「牽牛織女」伝承が成立し、その後の伝承に「牽牛」と「織女」の性格がたつたわつたためであろう。
- 35 小南は「七夕の伝承と犬とが結びつく」ことを指摘している。(27p)
- 36 このタイプが現在の中国でもっともよく語られている(小南)。ただし、織女が白鳥でやってきても、それを捕まえるのは牛飼いである。
- 37 ちなみに『日本昔話辞典』は「白鳥処女」の項目で「失踪した妻を探す夫」(AT500)としているが、前途のとおりAT400の間違いである。山本節がAT500としているのもそれにしがったものであろう。また同書および『日本伝記伝説大事典』角川書店1986で「未知のものの探索」AT465Aとも関連するとしているのは疑問である。465は「絵姿女房」である。(注3参照)
- 38 ふつうの昔話では予備試練と本試練があり、最初の予備試練で、最後の怪物退治のための道具を手にいれる。この二重構造はメレチンスキーによって昔話の基本形とされる。
- 39 「おそろしい接吻」(fier baiser)はフランスの中世説話のモチーフとして、「謎の美男子」(Bel inconnu)などの説話の主要な要素とされている。怪物や大蛇、がま蛙などに思い切って接吻をすると魔法がとけ、美女、または美男子が現れる。
- 40 Marie de France: Lanval, in *Lais*. 12世紀フランスの物語作家。「レ」はバラードの形をとった物語で、その中に「ランヴァル」がある。妖精に愛されたランヴァルはその秘密を人にあかしてはならなかった。王妃が彼にいいよるが、ランヴァルは退ける。王妃は彼が彼女に不倫をせまつたと讒訴する。ランヴァルは王妃よりはるかにうつくしい女人を恋人としていることを理由に潔白を主張する。王妃よりうつくしい女人がいるなら連れてきてみせるがよいと王が言う。裁きの場に妖精がやってくる。ランヴァルはその馬の尻にとびのつてともに妖精界へ消え去る。
- 41 Le Géant Calabardin et la princesse aux cheveux d'or, in *Contes de la Basse Bretagne*, recueilli par Fr. Luzel, 1886.(邦訳、『不思議な愛の物語』ちくま文庫、篠田訳)
- 42 これらの物語でくりかえし現れる「三日」「三晩」「三つの試練」などの三の数は、昔話の好む数で、三度目の正直のような、なんども失敗したあげくに成功するばあいに使われるが、失敗しても一回きりであきらめず、なんども挑戦するという性格をあらわしている。これがヨーロッパ型の試練の特徴である。
- 43 もっとも多いのは「鶴女房」型の「見るな」の禁である。あるいは「見るな」の座敷をあけてはならない」というのが、「鶯の里」である。「浦島」では玉手箱をあけてはならない。しかし、その「禁忌」はタブーというより、鶴女房であれば、「見ないでくれ」という願望であ

- り、それをやぶっても、鶴が悲しげに去ってゆくだけで、男のほうにはさしてひびかない。
- 44 D elarue et Tenezeの目録では400でカケス、蛇、鹿、鶯鳥、火の玉、天女、401で蛇、蛙、山羊、悪魔つき、地面にうまった女、鹿、獣、トカゲ、などである。
- 45 この旅もトンプソンによればmagic journey とされる。The Types of theFolk Tale, FFC 184
- 46 Conte populaire français, Maisonneuve et la Rose,
- 47 よく知られている話だが、標準的と見られる話の要約をかかげる。「狩人が水浴びしていた天女の着物を隠して女房にした。やがて子供も生まれたが、子供に着物の隠し場所を聞いた女房は、夫の留守に着物を着て、いごづるの木を伝って子供と一緒に天に帰ってしまった。狩人は二匹の犬を連れて天に登り、天女の父親に「婿にしてくれ」と申し込んだ。様々な無理難題を女房の助けで切りぬけ、最後に父親は「婿にしてやるから」と瓜の番人を申し付けた。女房は「天で瓜を食べてはならない」と警告したが、喉の乾きに耐えかねた狩人は一つ瓜を食べてしまった。すると瓜の中から大水が溢れだし、狩人を下に押し流した。これが七月六日のことで、だから七夕には瓜を供えない」。『いまは昔むかしは今(全五巻)』 網野善彦ほか著 福音館書店
- 48 風土記ほかの「神話」伝承と、昔話、そして古説話や、謡曲などにまたがったテーマだけに、日本では古代・中世文学研究の領域と、昔話研究の領域、そして比較神話学の領域で、話が食い違ふし、たとえば谷川健一の『白鳥伝説』では物部氏の家系伝承に歴史的に結び付けようとして一層の混乱を引き起こす。ここでは主として日本の昔話「天人女房」と世界の「白鳥処女」、そしてフランスの昔話「悪魔の娘」を神話学的に比較する。
- 49 「舌きり雀」では、婆においだされた雀をさがしに爺がでかけ、馬の小便を桶に7杯のんだら道をおしえてやるといわれて、それをやりとげたりする。試練としても最大級のものがある。
- 50 関敬吾の『日本昔話大成』では、白鳥の例はひとつもない。
- 51 天へゆく方法としては、かぼちゃなどを植え、その蔓をつたってゆくという話が日本ではおおい。これはかならずしも世界的に普遍的な形とは言えない。成長の早い樹木や豆の木などを伝って天へのぼる話はないが、オセアニアなどでは舟で水平線のかなたまで行って、そこから天へのぼったりする。
- 52 朝顔、瓜、瓢箪などの蔓植物が日本ではおおい。これは地域的偏差で、外国ではマメの木にのぼって天へゆくというのもなくはないが、おおむね、地の果てまであるいてゆくとか、水平線の彼方へ船でゆく。あるいは鶯にのってゆくなどと語られる。「バスラのハッサン」では地の果てまであるいて、さらに鶯にのったりする。AT400では鶯、日月、風、あるいは千里靴をつかう。この最後のばあいは旅の途中でけんかをしているものをみかけて仲裁し、あらそっていた宝物をとりあげる。そのなかに千里靴がある。日月というのは、地上のすべてをみおろしている日月にどこへ行けばさがしている王女がみつかるかたずねるのである。風は風の精霊にとおくまでつれていってもらう。
- 53 山本節「天へ昇る犬と獵人—天人女房譚の一類型—」『神話・象徴・文化Ⅲ』楽柳書院2007。
- 54 ほかには天からつるべや綱がおりてくるものもある。
- 55 もうひとつは、中国では牛を殺してその皮の力で昇天するというように、魔術的、あるいは儀礼的要素があるのに対し、牛のかわりに犬を登場させる日本の物語では、その犬には中国の牛のような魔術的、超越的要素がないということが指摘できよう。昔話においても日本では超自然の要素が少ないのである。
- 56 地の果ての「黒山」はAT313の悪魔の城としても使われる。AT400でもAT313でも、「天」であることは皆無で、黒山、緑山、ガラス山、金の城などである。
- 57 低地ブルターニュの「王女トロイオル」など。リュゼール『低地ブルターニュ昔話集』。「食べてはいけない」というのに、魔女がりんごを食べさせるので、つい食べてしまう。すると、眠り込んで王女がいくらゆすってもおきないのである。「二文のヤニック」(『ふしぎな愛の物語』篠田訳、ちくま文庫1992)ではポケットの中の豆をついかじってしまう。これは中世説話「ギンガモール」などで、りんごを食べたとたんに妖精の世界へもどれなくなるというのと同じである。食べ物、飲み物を口にすることがおおく、その結果、眠り込んでしまうのは付随的だろう。食べてはいけないという禁忌をやぶったとたんに、王女がまた魔法使いにさらわれるのである。これと似た状況は日本ではのちにとりあげる「梵天国」で、鬼に水をやった結果、王女を失う。「天人女房」でも瓜を切るというのは、瓜を食べることを前提にしており、たべてはならなかったのだ。冥界の食べ物をお口にしたら後は、地上にもどれないというイザナミ=ベルセポネの禁忌も思い出される。不合理な禁忌だが、おおくは食べ物にかかわっている。衣、接吻ということもある。

- 58 『羽衣』は謡曲にもあるが、三保の伝承として『風土記逸文』に見られるものを原型とする。「三保松原者、在駿河國有度郡。有度濱北、有富士山。南有大海洋。久能山嶮於西。清見關田子浦。在其前。松林蒼翠、不知其幾千萬株也。殆非凡境。誠天女海童之所遊息也。按風土記、古老傳言。昔有神女。自天降來、曝羽衣於松枝。漁人拾得而見之、其輕軟不可言也。所謂六銖衣乎。織女機中物乎。神女乞之、漁人不與。神女欲上天、而無羽衣、於是、遂與漁人為夫婦、蓋不得已也。其後一旦、女取羽衣乘雲而去、其漁人亦登仙云」。林道春『本朝神社考』第五卷、三一丁表～
- 59 「悪魔の娘」については長野晃子「悪魔の娘」『昔話と妖怪』（『昔話－研究と資料－12号』）にくわしい分析がある。
- 60 この女主人公の性格について、父親の悪魔とは似ていないこと、その父親を捨てて逃げ出すことなどから、「鬼にさらわれた美女」の類ではないかと考えられるばあいもあり、長野は、「妖精の取替えっ子」である可能性もあろうと言っている。
- 61 これを「天人女房」において見れば、天女から羽をとって人間にするところに相当するとも言える。羽衣を着れば天人になる。羽衣をうばえば人間になるのである。水浴もすでにその地上適応のプロセスの一部かもしれない。羽をとって、水浴をして、異類の性格をあらいながし、人間になる。「悪魔の娘」のばあいも異界と人間界のさかいで、待たせておき、主人公がむかえにくることによって、（あるいはそこで一旦忘れられて、あらためて認知されることによって）地上の社会に受け入れられる。異類を人間界に受け入れるための試練である。
- 62 「眠り」のモチーフは「森の眠り姫」などに見られるように、時間や次元をこえて男女がであうときのプロセスである。「忘却」のモチーフとも関連する。「眠り」によって異次元から地上へやってきて、「目覚める」のである。天女が羽衣をきるとそれまでのことを忘れ去るということもそれと同じである。目覚めていた間が地上の生である。うまれる前、死んだあと、そして異次元の生が「眠り」で象徴される。
- 63 イザナギが逃げ出すときに、もっている黒御鬘、櫛、桃をなげると最初のふたつは障害物になる。これと魔法変身をして追跡者を逃れる話はモチーフインデックスでは同一カテゴリーとされ、AT313でも双方が使われるが、フランスではものを投げる例は少ない。
- 64 この種の敵対者に与えられる課題や危害は、試練、難題、危害の三種に分けられる。「絵姿女房」で殿様が課す課題「打たぬ太鼓のなる太鼓」などは「難題」である。かぐや姫が課す難題とおなじ、実現を期待しないものだ。オホアナムチに対して兄弟たちが山の上から猪といつわって転げ落とした焼け石は、「危害」である。「火の鳥」などで、「ライオンの乳をとってくる」などというのも、「危害」を目的とした「難題」で、蛇の室は「試練」ともみられる。実際に似たような試練をオリエントの密教の入門試練などでは課されることがあったようである。ゲルマンの男性結社で「裸で一年、森の中でくらす」などというのももちろん試練である。それをやり遂げれば、たくましい戦士になっている。天の畑で伐採、種まきなどを一日でやるようにというのは、婿としてふさわしいかどうかの試験であり、難題ではあるが、試練である。相手の能力をためす試験、困難を克服して成長することを期待する試練、相手をこまらせるなり、とおざけようとして課した悪意のある難題、相手を殺そうとする危害に分けられる。
- 65 新倉朗子訳『フランス民話集』岩波文庫、1993
- 66 AT313については長野晃子論文参照。
- 67 ドイツではほかに「七羽の鳩」がある。妖精は鳩もしくは白鳥である。池で水浴しているところを伯爵が着物を隠して捕まえる。伯爵が留守のあいだに妖精は長持ちの中の羽衣をみつけて飛んでゆく。伯爵はもってきて、出来事をしり、魔法の山へいって七匹の山羊のうちの一匹の背中の中によって魔法の城へゆく。魔法は伐採、草の刈り取り、池に橋をかけるという試練を課す。妖精と伯爵は逃げ出す。姉妹がおいかける。変身魔法でのがれる。最後に魔法が国境で黄金の胡桃をなげる。無尽蔵の黄金がでる。この最後のあたりはスサノオの話の思わせる。（『世界の民話』ぎょうせい）
- 68 チェコの「白鳥姫」（『世界の民話』）では、悪魔の城で何ヶ月か下男奉公をしたあと、池にくる白鳥をつかまえて羽根を三本ぬくと王女になる。しかし長持ちにいられてしまっていた羽根をとりもどされて、王女がいなくなる。雌ヤギが助けてくれ、三羽の白鳥が水浴びにくる池につれていってくれる。魔法がそれを邪魔して、三日つづけて魔法のりんごなどをたべさせ、主人公をねむりこませる。最後に雌ヤギが白鳥の城へつれてゆく。王女が投げる指輪を剣でうけとめる。発端は『悪魔の娘』である。援助者は山羊である。白鳥の変身はあるが、王女が白鳥になって逃げてゆく話はバスラのハッサンの話の借用とみられる。白鳥の池について三度、白鳥を捕まえようとして眠り込む話はAT401のモチーフである。

- 69 AT879「バジルの鉢」でも使われるが、AT304「巧みな射手」でも使われる。
- 70 女主人公の比較では、「悪魔の娘」のほうが「天人女房」よりはるかに積極的で、かつ、魔術にも長けている。天人女房は羽衣をとられて、身動きができなくなっている受動的な娘であり、天では父親の命ずる試練を助けるが、悪魔の娘のように主人公と一緒に親の元を逃れたり、ときにはその父親を平然と殺してしまったりする強さはない。しかし、これは日本のかつての女性像と、フランスの女性像の違いでもあろう。
- 71 オホアナムチが根の国へ行くとスサノオが難題を課すが、スセリヒメが助けてくれる。そのあとスセリヒメと一緒ににげだすときに、持ち物をなげて障害物をつくる。
- 72 関敬吾『日本昔話大成』
- 73 比較神話学者の山本節も『搜神記』の例を挙げて「この話が稲米儀礼とともに日本に渡来した」可能性を示唆している（『説話の森』510p）
- 74 依田千百子「韓国巫俗神話の天上世界」『神話・象徴・文化Ⅲ』楽蔭書院、2007
- 75 柳田もこれを同種の難題とみていた。（『定本』6-178p）
- 76 「悪魔の娘」で、忘れられた娘が求婚者たちをしりぞけるために、一晩中閉まらないドアを閉めさせたりするのも難題の一種で、『竹取物語』の難題と性格は同じである。
- 77 これは、難題を課すのが殿様で、田畑の地主などとは違うからかもしれない。
- 78 メリユージュヌは「見るな」というのを見ると蛇だった。しかし、それでも妖精はとどまっていた。その秘密を口外しなければよかった。むしろ秘密を共有しているあいだは共犯関係にあったのだ。秘密が暴露されると、妖精はとどまることができなくなる。「鶴女房」は「見るな」というのを見ると鶴だった。このとき、鶴は人間と鶴は一緒になれないものであり、鶴であることが知られた以上はここにとどまれないという論理でさっさとゆく。「鶯の里」では「見るなの座敷」をあけてみると、とたんに屋敷が消え、野原になる。同時に人間の姿をしていた鶯も人間になりることができなくなる。浦島の玉手箱も同じで、あけると竜宮へもどれなくなる。一種の魔法が禁忌によって保証されており、それにそむくと魔法が消えるのである。そのような禁忌と、道におちていた金の羽をひろってはいけないという禁止とは同じではない。羽をひろうととんでもない災難がふりかかる。瓜をきるなどというのは、この後のほうの禁止で、本当の禁忌ではない。
- 79 崔仁鶴『韓国昔話の研究』、なお中国でも『山東民話集』の「玉の鹿」では鹿がでる。
- 80 福島の場合でとなりの婆が天へのぼる方法を教えてくれる。
- 81 『日本人の動物観』、海鳴社、1986
- 82 「ジャックとマメの木」は多少特殊なケースである。1809年にタバートによってだされた一種の創作民話ともみられるもので、筋としてはAT328「悪魔の宝物を盗む少年」だが、マメの木が天に達するという語りだけよく知られている。AT328とマメの木のモチーフはふつうは結びつかない。それに天に人食い鬼がいるというのもヨーロッパではちょっと珍しい。ジャックがその鬼のところから、金の卵をうむ鶏や不思議な堅琴をぬすむところ、そして堅琴がなりだして目をさました鬼がおいかけてくる場所は、ほかでも見かける話であり、オホアナムチがスサノオのところから天の詔琴を盗み出す話にもつながっている。
- 83 柳田は、本来、瓢箪であり、「浮宝になり、空を渡る船の代わりともなり得る」（『定本』6-429p）と見る。
- 84 ちなみにAT313ではフランスの伝承をみるかぎり、犬が出てくる例はない。瓜もないのは言うまでもない。AT400-401でも犬も瓜もみかけない。AT300では「犬をつれた英雄」という総題でよばれることもあるように、英雄が犬をしたがえていることが多い。なお、山本節（前掲論文）によれば中国雲南省の「天人女房」伝承では4例ほど、犬が出てくる。犬に月まで霊芝をとりに行かせるとか、犬が獵師をまもったという話である。

文献目録

- Aarne, Antti & Thompson, Stith 1961: *The Types of the Folktale*, FFC, 184,
- Bladé, Jean-François 1967: *Contes populaires de la Gascogne*, Paris, Maisonneuve et Larose
- Cadic, François 1997: *les contes populaires*, Rennes, Terre des Brumes
- Carnoy, Henri 1885: *Contes français* Paris, E.Leroux
- Comehair-Sylvain:1925: *Contes haitiens*, Paris, Sorbonne,
- Cosquin, Emmanuel 1978: *Contes populaires de Lorraine*,

- Paris, Laffitte Reprint
- Delarue, Paul & Tenèse, Marie-Louise 1976: *Le Conte populaire français*, Paris, Maisonneuve et Larose
- Grange, Isabelle 1981: *Essai d'interprétation de certains personnages ornithomorphes du folklore français*, Paris, Thèse EHESS,
- Half-Lancner, Laurence 1986: *la fée au moyen âge*, Paris, Champion,
- Luzel, François 1903: *Contes populaires de Basse-Bretagne*, Paris, Maisonneuve et Larose, 3 vol.
- Massignon, Geneviève 1983: *De bouche à l'oreille, le conte populaire français*, Paris, Berger-Levrault
- Pouorrat, Henri 1987: *Contes*, Paris, Gallimard
- Sébillot, Paul 1967: *Contes populaires de Haute-Bretagne*, Paris, Maisonneuve et Larose, 2 vol
- アフアナシエーフ 中村白葉訳 1977 ロシア民話集 東京 現代思潮社
- 池田修訳 1989 アラビアン・ナイト 15-16 巻 東京 平凡社
- 白田甚五郎 1973 天人女房その他、東京、桜楓社 (白田甚五郎著作集 5 おうふう 1995)
- 飯倉照平 1993 中国民話集 東京 岩波書店
- 伊藤清司・森雅子 1981 中国の民話 東京 大日本絵画
- 稲田浩二ほか 1977 日本昔話事典 東京 弘文堂
- 稲田浩二 1977 日本昔話通観 京都 同朋舎
- 稲田浩二 1988 昔話タイプ・インデックス (日本昔話通観 別巻) 京都 同朋舎
- 稲田浩二 1993 日本昔話とモンゴロイド (日本昔話通観 別巻) 京都 同朋舎
- 稲田浩二 1998 日本昔話と古典 (日本昔話通観 別巻) 京都 同朋舎
- 井本英一 1982 羽衣の話 世界口承文芸研究4 大阪 大阪外国語大学
- 岩本裕 1974 仏教聖典選 2 東京 読売新聞社
- 岩本裕 1994 インドの説話 東京 紀伊国屋書店
- 小沢俊夫編 1976 世界の民話 東京 ぎょうせい
- 河合隼雄 1982 昔話と日本人の心 東京 岩波書店
- 君島久子 1987 天女の末裔、『民間説話の研究』京都、同朋舎、
- 篠田知和基 1992 不思議な愛の物語 東京 筑摩書房
- 崔仁鶴 1976 韓国昔話の研究 東京 弘文堂
- 関敬吾 1978 日本昔話大成 東京 角川書店
- 関敬吾 1982 昔話の歴史『関圭吾著作集2』京都、同朋舎
- ダグラス 松村武雄訳1977『スコットランドの民話と伝奇物語』東京 古典文庫、
- (Douglas, George Brisbane: *Scottish fairy and other folk tales*)
- 辻直四郎 1978 古代インドの説話 東京 春秋社
- 長野晃子 1983 「悪魔の娘」『昔話と妖怪』(『昔話-研究と資料-12号』) 東京 三弥井書店
- 中村禎里 2006 日本人の動物観 東京 星雲社 (初版 東京 海鳴社、1986)
- 新倉朗子 1993 フランス民話集 東京 岩波文庫、
- 西村真次 1927 「白鳥処女説話の研究」『神話学概論』東京 早稲田大学出版部、
- 松村武雄 1976 中国神話・伝説集 東京 社会思想社3 (『支那神話・伝説集』1927)
- 三宅忠明 1975 スコットランドの民話 東京 大修館
- 村松一弥 1972 中国の民話 東京 毎日新聞社
- 村松一弥 1976 苗族民話集 東京 平凡社
- 柳田國男 1962 定本 柳田國男集 東京、筑摩書房
- 山本節 1989 神話の森 東京 大修館
- 山本節 2007 「天へ昇る犬と獵人-天人女房譚の一類型-」『神話・象徴・文化Ⅲ』名古屋 楽瑯書院
- ヤン・デ・フリース 1984 インドネシアの民話 東京 法政大学出版局
- 吉川利治 1981 タイ族の羽衣説話 世界口承文芸研究 2 大阪 大阪外国語大学
- 吉川利治 1982 タイ族の羽衣説話再考 世界口承文芸研究 3 大阪 大阪外国語大学
- 依田千百子 2007 「韓国巫俗神話の天上世界」『神話・象徴・文化Ⅲ』名古屋 楽瑯書院

(掲載許可2007年7月23日)